

出 会 い を 紡 ぐ

高齢者・障害者・子育て世帯居住安定化推進事業＜先導的事業＞選定事業
「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」事業報告書

はじめに

本報告書は、2013年度の国土交通省「高齢者・障害者・子育て世帯居住安定化推進事業＜先導的事業＞」に選定された京都YWCAの事業の2年間(2014～2015年)を報告するものである。公益財団法人京都YWCAは「女性高齢者に住まいと社会参加の機会を提供する多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」を提案した。本報告では、その提案に基づいて開始したサービス付き高齢者向け住宅に居住する高齢女性の生活と、同じ建物内で行われる京都YWCAの事業・活動およびそれらに関わる人々との関係を検証し、その成果と課題について考察し、今後を展望する。

京都YWCAは1923年に設立された、女性が中心となって運営する市民団体である。京都市の中心部に位置する建物を拠点に、長年、会員ボランティアがさまざまな活動を行ってきた。10年程前より建物の老朽化に伴い大規模改修の必要性が認識されるようになり、建物改修を検討するとともに、変動する社会の中で市民団体としての進むべき方向を探った。これからの社会に何が求められているかを議論し、組織の基本理念に合致し、かつ市民団体として蓄積した経験やネットワークを活かせる事業を模索した。

その結果、2013年に、「サービス付き高齢者向け住宅」、「ふれあいの居場所食堂」、「自立援助ホーム」を新事業として実施することを決めた。改修工事については、上記国土交通省の補助事業の「住宅及び施設の整備」に選定され、2014年8月に建物の大規模改修および耐震補強工事が終了した。また、2014年度と2015年度の2年間、居住に関する社会実験に挑み（「技術の検証」）、それに関する「情報の提供及び普及」にも取り組んだ。

私たちは事業提案にあたって以下の課題を設定した。

- 高齢者に、他者との関係を築き社会と関わる社会参加の機会をいかに提供できるか
- 市民活動拠点として蓄積したコーディネート力を活かして多様な特性をもつ人々を有機的に結ぶ魅力あるコミュニティを築けるか

京都 YWCA では、子どもと親の「育ち」支援、外国籍住民や留学生への支援、平和のため学習・活動などを中心に、子どもから高齢者まで、さらに多様な文化的背景の人々を巻き込んで事業および活動を行っている。また、女子留学生寮を運営し、留学生の日本での生活を支援する活動も行っている。これらを踏まえて、2014 年から、人々が交流し協働する「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」に取り組んでいる。

京都 YWCA サービス付き高齢者向け住宅「サラーム」は 2014 年 9 月から開始したため実績はわずか 2 年に満たないが、そこから見えてきたものがある。本報告ではサラーム居住の高齢女性たちが、会館で活動するボランティアや会館に住む留学生や自立援助ホームの若い女性や地域の人々とどのように出会い交流する機会を得たか、またそれが高齢女性や地域にどのような影響をもたらしたかを検証する。

本報告が、福祉・医療を専門としない市民団体がその経験と資源を活かして今後の超高齢社会にいかに貢献できるかを探る上で一助になることを願っている。

2016 年 7 月

京都 YWCA 「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」

事業報告書 編集チーム

目次

はじめに	2
PHOTO GALLERY	5
第1章 事業に至る背景	15
1. 京都 YWCA の歴史	16
2. 京都 YWCA の組織と活動	17
3. 建物と事業の変遷	19
4. 社会変動と中長期ビジョン・プロジェクト	20
5. 工事と新事業の開始	23
第2章 サービス付き高齢者向け住宅「サラーム」	27
1. 事業の経緯と現状	28
2. サラームに居住する人々	34
3. サラーム居住者座談会	50
第3章 「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」の取り組み	61
1. 関連する事業（居場所食堂、自立援助ホーム、留学生寮）	62
2. さまざまなボランティア活動委員会の活動	70
3. 実施した関連イベント	79
第4章 ニュースレターでたどる 「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」	87
1. 高齢者住宅「サラーム」	88
2. 居場所食堂「うららかふえ」	92
3. 自立援助ホーム「カルーナ」	96
第5章 評価—成果と課題	101
1. 本事業固有の背景	102
2. 成果	102
3. 課題	108
第6章 提言と展望	111
1. 提言	112
2. 展望	116
3. 終りに	117

PHOTO
GALLERY

2014-2016



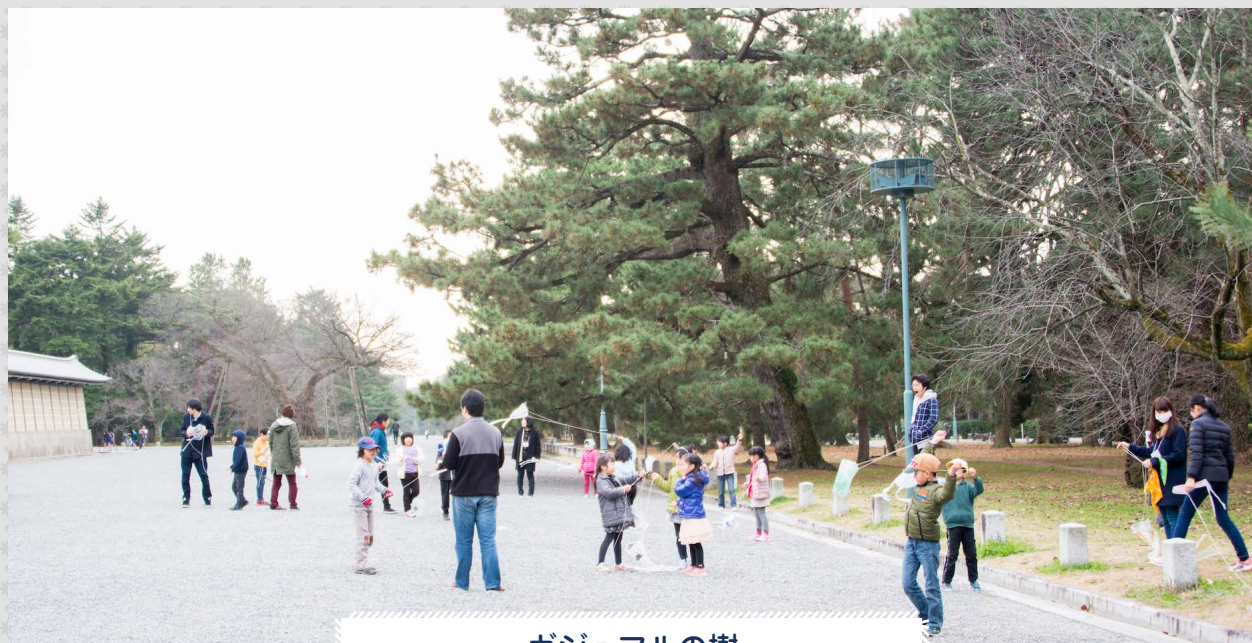
あきまつり



クリスマスバザール



あじさいバザール



ガジュマルの樹



事業報告会



上野千鶴子さん 講演会



韓国 YWCA とのユース交流プログラム



蕎麦打ち・交流プログラム



留学生支援「すけっと」プログラム



留学生の日本文化体験

ふれあいの居場所食堂
うららかふえ



cozy shop 夏みかん



高齢者向け住宅

サルーム



自立援助ホーム

カルーナ





京都 YWCA に関わるみなさん



第1章

事業に至る背景

1. 京都 YWCA の歴史

1.1 誕生

YWCA (Young Women's Christian Association) は 19 世紀の産業革命の時代にイギリスで始まった女性運動である。キリスト教を精神的支柱にして、農村から都会へ出てきた若い女性のための宿舎やプログラムを提供する活動を行った。1894 年に世界 YWCA が設立され、苛酷な状況に置かれた日本の女子工場労働者を支えるため、女性宣教師たちが日本に派遣された。1905 年に日本 YWCA が設立され、東京にも津田梅子を会長とする東京 YWCA が発足し、女子寄宿舎事業を開始した。その後、横浜、大阪、神戸にも地域 YWCA が設立され、京都でも関東大震災のあった 1923 年の 3 月に京都 YWCA が発足した。



日本各地で学校 YWCA も設立された

1.2 黎明期～戦中（1923-1945）

京都 YWCA の活動は家庭婦人が中心であったが、当時も電話交換手、看護婦、事務員、工場労働者などの職業婦人がおり、職場における地位が低く社会的な支援もない時代であった。有職婦人部を設けレクリエーション指導などによって働く女性たちを元気づけ、女子学生のための寮を開き、英文タイプライタ科は多くの生徒を集めた。満州事変や世界恐慌の不況の中、外国人幹事の協力は断たれ、財政難に苦しみながらも、会館の所有権を得て 1935 年に財団法人化した。小規模ながらも充実した内容の京都女子学院を設立し、有職会員のための夏の休養所も設けた。しかし、これらは戦争が拡大する中で閉鎖を余儀なくされた。多くの他市の YWCA が戦中の混乱の中、軍などに会館を貸し出し、京都 YWCA も会館を京都府庁に貸し出した。

1.3 戦後の活動の展開

戦争直後の厳しい社会情勢の中、京都 YWCA は婦人相談所、児童相談所、児童図書館など市民のニーズを捉えた事業を行った。また、西陣の零細企業で働く中学卒業生を対象とした「働く少女のための生活教室」を開始した。戦後の YWCA は、戦争の時代に戦争へと向かう流れに対して無為であったことを反省して、憲法の非暴力・平和主義を貫く活動を進めている。また、「女性と子どものエンパワメント」を推進する市民団体として、子どもや子育て中のお母さんのためのプログラムや、若者を育成するプログラムを推進した。

1967年4月にそれまでの建物を建て替えて5階建ての新会館が完成した。新会館は、銀行借入や、募金、会債（会員からの借入）によって実現した。

1970年には、全国の YWCA が正会員をクリスチャンに限定したそれまでの制度を改め、ノンクリスチャンも同等な会員とする制度に変更し、京都 YWCA もそれに倣った。

2. 京都 YWCA の組織と活動

2.1 委員会制度

京都 YWCA は、成人女性による会員制度をとっており（男性は会友）、会員が有給職員の補佐を得つつも、さまざまなボランティア活動を主体的に行っている。会員は趣旨に賛同する女性なら誰でもなることができる。活動については会員が主導する活動委員会、事業については職員が実務を担い会員が委員となって事業に進言する事業委員会という委員会制度をとっている。京都 YWCA 全体が委員会制度を通じて会員ボランティアと職員の協働を実現していると言える。公益財団法人として経営責任は理事会が負うが、理事会も常に会員ボランティアとの意思疎通を重視して、理念と情報の共有に努めている。

活動は「一人ひとりを大切に」、「共に生きる世界をめざす」という組織全体の理念を共有しつつ、会員から自発的に生まれた活動に沿ってさまざまな委員会を組織し、確立した手順を踏んで運営していく。ボランティアは「お客さん」ではなく主体的に活動内容を決定し、リードしていく。YWCA の委員会制度は、長年蓄積し継承してきた、民主的かつ責任ある運営を担保するためのノウハウに基づく仕組みである。いくつかの活動委員会を束ねて会員活動全体の方針を決めているのがミッション推進活動「運営委員会」である（2000年以前は幹部委員会と呼んだ）。毎年、委員会の編成を再検討して次年度計画を立て、3月の定期会員集会にて会員全体で共有するシステムをとっている。

2.2 京都 YWCA の活動

上記の女性や子どものエンパワメントや平和活動に加えて、1970 年～1990 年までに現在の京都 YWCA の主要な活動の基礎となるグループがいくつか誕生した。1975 年に京都国際学校 PTA より引き継がれたスリフトショップ（リサイクルセール）を開始した。1987 年には日本への出稼ぎアジア女性の人権問題に取り組む AWT（Asian Women Together、後に滞日外国人全般を対象とした多言語電話相談 APT：Asian People Together に発展）の活動も始まった。1989 年に国際交流グループが発足し、ボランティアによる外国人のための「にほんご教室洛楽」が生まれた。国際 NGO として、海外で催されるプログラムに若者を送り出すことにも努めている。その他、シニアクラスなど、さまざまな活動がある。活動を担う主要メンバーの世代としては 50 代以上のシニアの占める割合が大きい、文字通り「多世代・多文化」な活動を展開している。「京都 YWCA がめざすもの」として数年来、以下を掲げている。

- 女性や子どもの人権が守られる社会
- あらゆる暴力を否定する社会
- 多様性を尊重し異なる文化や背景を持つ人々と共に生きる社会
- 「核」のない持続可能な地球環境

京都 YWCA の活動のもう一つの大きな特徴は、女性団体ならではの「食」の重視の伝統である。主婦である会員やボランティアのスキルを活かして、バザーやリサイクルセールで食事を提供したり、手作りお菓子を販売することを長年実施してきた。この中から、食事や喫茶を提供して人々がふれあえる居場所を作りたいという願望が生まれ、それを実現させたのが後述の新事業「うららかふえ」である。

3. 建物と事業の変遷

京都 YWCA の建物は、活動の場であると同時に「女性のための安心できる住まい」を提供してきたと言える。女性が一人でも安心して旅ができるためのホステル事業を行ったり、女子宿舎を運営し、外国人女性、高齢女性、親の虐待から逃れてきた女児や外国籍の女性や母子のための一時避難にも利用されてきた。これらの経験が、後述の現在実施している女性専用的高齢者住宅、自立援助ホーム、留学生寮につながっている。

同時に、京都 YWCA の建物は収入源として財政的に活動を支えてきた。しかし、営繕費増大の問題や、社会ニーズの変化への対応を幾度となく迫られてきた。本館建設（1967 年）以降の建物を巡る動きは以下の通りである。

本館建設の 1967 年から 1985 年までの 18 年間、1 階は活動の場としつつ、3 階から 5 階は日本赤十字病院看護婦寮として、2 階はホステルとして利用された。1985 年に看護婦寮の契約が解消されたため、3 階と 5 階を単身女子のための宿舎に改装し、4 階を YMCA 福祉専門学校の寮とした。しかし、2 階のホステル事業は売上伸び悩みから 1989 年に終了し、1996 年には専門学校寮の契約も解消された結果、1999 年には 2 ～ 5 階を 38 室の女子宿舎とした。

本館は築 10 年後頃から営繕費がかさみ始め、1986 年の看護婦寮から女子宿舎への改装には大きな費用を投じた。何度か大規模な補修工事の必要に迫られ、1985 ～ 1994 年の期間は毎年多額の営繕費を要した。

2002 年には、近隣の賃貸物件との競合もあり女子宿舎の空き室が増えて、家賃値下げや礼金・更新料廃止を行った。建築の専門家からは本館建物の寿命や改修について検討する必要性が指摘された。

2009 年度に立ち上げた中長期ビジョン・プロジェクト（後述）では、専門家から大規模改修やエレベータ設置や耐震工事の必要性、キッチン空間の有効活用などの助言を受けた。料理教室全盛時代に設けたキッチンはもはや大きすぎる上に老朽化しており、スペースの有効活用を目的として、2011 年にキッチンの改装工事を実施し、ミニホールとコンパクトなキッチンが誕生した。

京都 YWCA の会館は先人が苦勞して維持し、活動拠点としても活動を支える収入源としても機能してきた大切な場である。しかし、建物の劣化や社会の変化に応じた新しい発想が求められ、時代のニーズに合わせた活用を考えていかなければならないということが京都 YWCA 内部でほぼ共通認識となった。

4. 社会変動と中長期ビジョン・プロジェクト

4.1 公益法人制度改革の流れへの対応

1990年代に入り政府は戦後の諸制度の見直しを進め、2000年から2008年にかけて公益法人制度改革を進めた。組織は今まで以上に公益性、持続可能性、説明責任が求められるようになった。全国のYWCAが新制度への対応を迫られ、京都YWCAも2003年頃より公益認定をめざす取り組みを開始した。2006年、2007年には、活動の「公益性」について各委員会やグループで自己点検する「評価」活動を実施した。

京都YWCAは1935年に「京都基督教女子青年会財団」として京都府より認可を得たが、戦時中の1943年に京都基督教女子青年会維持財団となり、財団が財産を管理運営し、任意団体としての京都YWCAが会員活動を担う形をとってきた。制度改革の流れに応じるため、京都YWCAの寄付行為を変更し、事業と活動を統合した「財団法人京都YWCA」となり、その後2012年に新法の下での一般財団法人へ移行し、2014年8月に公益財団法人として認定された。

4.2 将来構想プロジェクト——ヴォーリス建築の魅力の再発見

建物の老朽化への危機感から2004年に将来構想プロジェクトを立ち上げた。京都YWCAの強みや弱みの自己分析を行い、YWCAにとっての2つの大きな課題、「財政」と「次世代育成」を解決するための道を探った。京都YWCAのもつ資源を洗い直す中で、従来「旧館」と呼んでいた木造2階建の別館である、ウィリアム・メレル・ヴォーリス設計の文化的建造物の魅力を再確認した。この別館の愛称を募集して聖書の「良きサマリア人」にちなんで「サマリア館」と名付けた。京都YWCAの将来を思う人の胸の内に、この建物の魅力を活かしたいという思いがあった。その過程で建築や空間デザインの専門家達からギャラリーやパン屋など、いくつかのアイデアをいただいたが、実現には多くの課題があった。（この建物の魅力の活用は、ようやく2014年9月にスタートしたふれあいの居場所食堂「うららかふえ」という形で実現することになった。）

4.3 中長期ビジョン・プロジェクト（2009-2012）

2004年からの将来構想プロジェクトがなかなか具体的な解決策につながらない中でも、いくつかの試みや動き（児童館事業案や、サマリア館の一部のカフェとしての貸出し案など）があった。しかし、いずれも最終的に実現に至らなかった。

これらの経験から、京都 YWCA のこれからの方向性を根本的に検討することが必要であると判断した。そこで、2009 年に「中長期ビジョン・プロジェクト」チームを立ち上げた。このチームは、理事・幹部委員（現在の運営委員）・職員で構成し、建物改修および新事業開発のプランづくりに取り組んだ。まず初めに、京都 YWCA という器を通して「私たちはこれから何をしたいか、何をすべきか」を議論した。そこから出てきたビジョンに沿って、どんな事業が可能かを検討する作業を 4 年間かけて行った。そして、以下のテーマを重点とすることを確認した。

- (1) 多文化共生と平和の実現に向けた活動
- (2) 女性と子どものエンパワメント
- (3) 多世代がふれあえる居場所の提供

いくつかの事業案を検討する中で、YWCA の精神を次世代につないでいくという視点から、3 つの事業（高齢者住宅、自立援助ホーム、居場所的食堂）の組み合わせに絞り込んだ。改修資金の借入とその返済のための安定的な収入の確保も考慮した結果、次のような建物利用プランを決めた。

本館 鉄筋コンクリート造 5 階建 / 1967 竣工 / 延床面積 1,532.55 m²	別館サマリア館 木造 2 階建 / 1936 年竣工 / 延床面積 227.23 m²
4・5 階：女子留学生宿舎（20 室） 3 階：自立援助ホーム （6 室、リビング＋ダイニングキッチン、事務室、相談室等） 2 階：サービス付き高齢者向け住宅（8 室＋共用居間） 1 階：活動の場	1 階（3 室）： ふれあいの居場所食堂 （コミュニティカフェ） 2 階：活動の場（5 室）

2012 年度には、3 つの新事業のための準備チームを編成し、調査活動を行った。以下は準備チームの調査報告の概要である。

高齢者住宅準備チーム

団塊の世代が 2015 年にほぼ退職し 2025 年には後期高齢者となる。今後高齢者向け賃貸住宅へのニーズが高まると予想し、京都 YWCA での高齢者住宅事業実施の可能性を探るため、施設見学や建設会社主催の高齢者住宅セミナー参加などを行った。一方、「高齢者の居住の安定確保に関する法律」の改正法案が 2011 年 4 月 27 日に国会を通過し、公的補助の対象が「サービス付き高齢者向け住宅」に一本化された。サービス付き高齢者向け住宅は、「住み慣れた環境で必要なサービスを受けながら暮らし続ける」というこれからの介護福祉行政の方向性に基づくもので、一定基準を満たす住宅と安否確認と生活相談サービスの提供が義務化された。建築・改修に際して国の一部補助がある。

自立援助ホーム 準備チーム

児童福祉法 33 条に基づく自立援助ホームは、義務教育終了後の児童養護施設等を経験した児童の自立支援を行う施設である。定員は 5 名から 20 名で、事務費（人件費ほか）および事業費（児童のための費用）が公的に支払われる。京都市内において、児童養護施設等を退所した児童、特に女子の支援施設が不足している現状をうけ、女子を対象とした自立援助ホームの開設の可能性についてチームで協議を重ねた。また、社会的養護を要する児童の自立支援を担当する行政機関（京都市保健福祉課子育て支援部児童家庭課、京都市児童相談所）や民間の自立援助ホーム（自立援助ホーム ボ・ドーム（大阪市平野区））などを訪問し、子どもたちの現状や事業内容、支援のニーズ等について聞き取り調査を実施した。その結果、自立援助ホーム開設は京都 YWCA にとって新しい児童福祉に関わる分野ではあるが、社会におけるニーズがあること、さらに、若い女性への自立支援は YWCA の理念に合致していることから、チャレンジするのにふさわしい事業と結論づけた。具体的には 15 ～ 20 歳の女子を対象にした定員 6 名のホームとし、「受容と見守り」を基本姿勢に、一人ひとりが自活・自立できるようになるまで「安心・安全な生活空間」を提供することをめざす。

ふれあいの居場所食堂準備チーム

それまで食事提供やお菓子作りに関わってきた京都 YWCA の会員ボランティアの間に、会館利用者と近隣地域の人々、また子どもからお年寄りまで、さらには多様な文化背景の人が利用できる開かれた交流の場となるカフェの実現を期待する声がある。会館利用者の食のニーズに応えると同時に、地域の人々に利用してもらえる場所として、また会館利用者を横断的につなぐ場となるように、雰囲気のあるヴォーリス建築のサマリア館 1 階の 3 室を改装してカフェとしたい。本館で予定しているサービス付き高齢者向け住宅の入居者がアクセスしやすい入口を設け、入居者がそこに集う人々と交流できるようにすることも目指す。まずは、火曜日から土曜日の昼間に「ふれあいの居場所食堂」として運営できる体制づくりを検討する。カフェへのアプローチとしては、本館から中庭を通ってのアプローチの他に、駐輪場となっている南側入口をサマリア館へのアプローチとして整備して、外部からのお客さんに入っていただけるようにする。

5. 工事と新事業の開始

5.1 国交省の先導的事业に応募

2013 年 6 月に国土交通省の「高齢者・障害者・子育て世帯居住安定化推進事業＜先導的事业＞」に応募し、9 月に選定通知を受けた。京都 YWCA は、①住宅及び施設の整備（2014 年）、②技術の検証（2014、2015 年度）、③情報の提供及び普及（2014、2015 年度）に応募して選定された。

事業開始までの準備期間において、それまで実施していた一般単身女子向け宿舎事業を終了した。資金調達として、数社の金融機関の中から融資してもらう一行を決めた。また、新事業のための募金（目標 1,000 万円）と会債（目標 1,500 万円、1 口 10 万円、無利子、償還期間 5 年または 10 年）を財務部ファンドレイジングチームで進めた。

5.2 改修工事

改修設計については過去にサマリア館を設計したヴォーリス建築事務所に依頼し、耐

震診断を実施した結果、耐震補強が必要であることが判明した。建築事務所担当者と話し合いを重ね、京都 YWCA で活動する人々の意見を設計案に反映させた。

2014 年 1 月に工事業者を決める入札を行った結果、人手不足や建設資材の高騰、耐震補強費用などの理由から入札予定価格範囲に入る業者はなく、予定を大幅に上回る工事費がかかることが分かった。設計の絞り込みを行い、ようやく工事業者を（株）田中工務店に決めた。2014 年 2 月よりサマリア館工事に着手し、2014 年 8 月に本館の改修工事は無事終了した。

5.3 新事業の開始

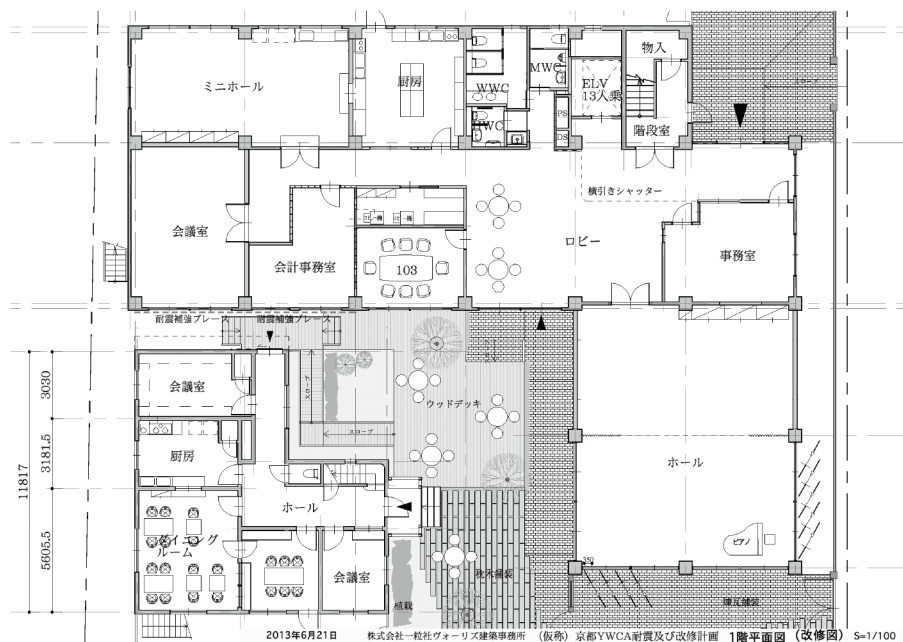
サービス付き高齢者向け住宅は前年度からの準備期間を経て、入居者募集を開始した。地域の方々への説明会を実施し、2014 年 8 月には内覧会を実施した。9 月より入居が始まり、2016 年 3 月現在、定員いっぱいの 8 名が契約（入居）している。

ふれあいの居場所食堂「うららかふえ」はトライアル営業を経て、2014 年 9 月 9 日にオープンした。フェアートレード商品など、こだわり商品を販売するショップもカフェ併設で同時に開いた。火曜日から土曜日までの 11 時から午後 4 時まで、（週 1 ～ 2 日の委託日を除く）毎日、ボランティアがチームを組んでランチとコーヒー、紅茶、ケーキを提供している。

さらに、本館建物の 4 階と 5 階を改装した女子留学生寮（20 室）「あじさい寮」を、高齢者住宅や居場所食堂の開始と同時期の 2014 年 9 月より運営を開始した。

半年遅れの 2015 年 4 月より、自立援助ホーム カルーナが 2 名の入居者を迎えて事業を開始した。カルーナは 10 月には定員いっぱいの 6 名の入居となり、24 時間 365 日の職員態勢で運営している。





初期の1Fのフロアプラン（中庭等一部変更あり）



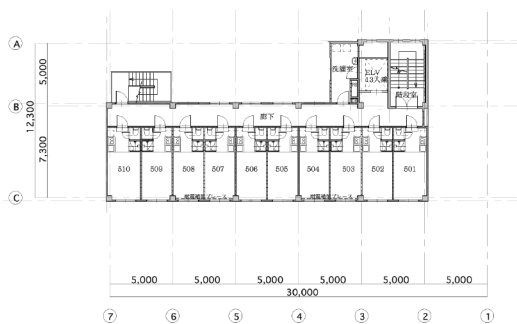
初期の2Fのフロアプラン（屋上等一部変更あり）



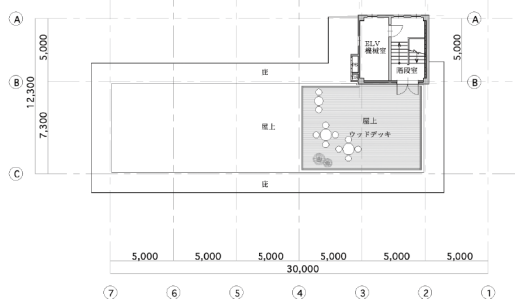
2013年6月21日 株式会社一般社団法人建築事務所 (改訂) 京都YWCA設置及び改修計画 3階平面図 (改修図) S-1/100



2013年6月21日 株式会社一般社団法人建築事務所 (改訂) 京都YWCA設置及び改修計画 4階平面図 (改修図) S-1/100

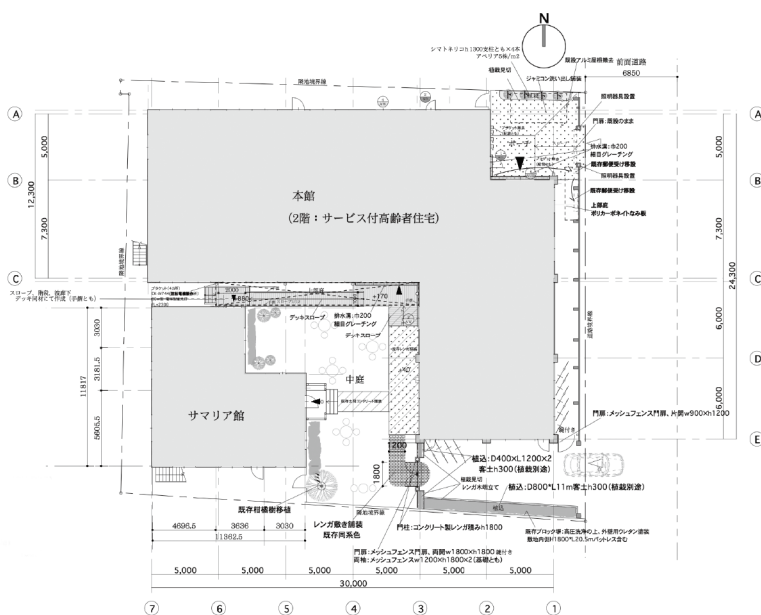


2013年6月21日 株式会社一般社団法人建築事務所 (改訂) 京都YWCA設置及び改修計画 5階平面図 (改修図) S-1/100



2013年6月21日 株式会社一般社団法人建築事務所 (改訂) 京都YWCA設置及び改修計画 6階平面図 (改修図) S-1/100

初期の3F-5Fのフロアプラン (一部変更あり)



中庭と玄関の最終プラン



(サラーム共用の居間)

第2章

サービス付き高齢者
向け住宅「サラーム」

サラーム

1. 事業の経緯と現状

1.1 事業の経緯

1.1.1 準備期間

サラームは2014年9月より事業を開始した。職員が見守りや生活相談の実務を担う一方、準備段階から京都YWCAの会員ボランティアと職員で構成する「サラーム運営委員会」を設けて、入居者に安全・安心かつ充実した生活を送っていただくための工夫や諸課題を協議しながら進めてきた。運営委員には京都YWCAの会員である社会福祉士や介護福祉士がメンバーとして加わり、準備段階からサービス内容や設備等について検討を重ねた。

まず、YWCA会館内に高齢者住宅を設けたことについて地域の理解と協力が必要と考えて町内の民生委員や老人福祉委員への挨拶に出向いた。また、YWCAの事業全般について町内向けの説明会を催した。高齢者を居住者として迎えるにあたり、職員や会員ボランティアの心構えを学ぶために長く介護を経験された会員の話を伺う機会をもった。

1.1.2 内覧会と入居状況

2014年8月末に、完成した居室フロアを案内する内覧会を開催した。事前に地域包括センター、居宅介護支援事業所や関係団体に内覧会案内を送るとともに、地域の方にもオープンな形で実施した。

応募、面談、入居判断を経て9月より徐々に契約・入居が始まり、12月の段階で8室全室が契約状態となった（入居者の年齢は70代後半から90代前半まで）。個人的理由で日常的にサラームに居住するのではなく前の住居と往復される方もいる。京都新聞での紹介記事もあり、問い合わせが多数あった。

1.1.3 事業開始と入居者の様子

毎日、最低1回職員が居室を訪問して安否確認を行い、生活相談に適宜応じている。また、24時間のセコム・ホームセキュリティ（防犯、火災監視、非常通報、緊急通報、ライフ監視サービス）サービスを利用している。食事は自分で作られる方もいるが、YWCAの別館にあるカフェ（うららかふえ）でランチを利用され、このランチが食事の軸になっている方が多い。カフェ休業時の食事については、配食サービスの案内をしているが、YWCAで用意する手作りの食事を利用される方が少なくない。

体調については、元気な方もいるが、病気で入院される方もいる。外部からの介護サービスを受けつつサラームで暮らす方もいる。病気で入院後サラームに戻り、

再度入院される方もいたが、サラームが自分の帰るべき場所とあっていただいているようであった。

1.2 入居者の社会参加

1.2.1 内部交流

○ オリエンテーション

入居者と会員ボランティアとの交流を目的として、事業開始1ヵ月後に入居者向けオリエンテーションを実施し、京都YWCAについての説明とプログラムへのお誘いも行った。

○ カフェの利用

自分であまり調理をされない入居者は、火曜から土曜日に営業しているカフェを利用されている。カフェはボランティアが働き手となっており、そこで出会う働き手や他の客とのふれあいは自然な形で人々と出会い、言葉を交わす機会となっている。

○ 入居者間およびボランティアとの交流

サラーム運営委員会として、京都の春夏秋冬を味わう交流会を企画・実施した。幸い京都御所が近くにあることから、春は御所でのお花見、夏は中庭での花火、秋は御所での紅葉狩りをそれぞれ食事会と組み合わせて実施した。このプログラムには入居者のほとんどが参加され、入居者とボランティアや職員との良き交流の場となっている。

4、5階に住む留学生との交流に関しては、料理の得意な入居者がリードして、お正月にサラームの共同の居間でお雑煮を食べる会をもった。留学生とはエレベータや会館内でのプログラムで出会うことを通じてふれあう機会も少なくない。

一方、3階の自立援助ホームの入居者とのふれあいについては、ホームは始まったばかりであり、ホーム入退去のサイクルが短いことや、ホーム入居者とサラーム入居者の生活時間帯が異なることから、親しい関係を生み出す状況は今のところ実現していない。しかし、出会う機会も少なくないため、思わぬふれあいの関係が生まれる可能性も期待できる。

○ プログラム・ボランティア活動への参加

隔月発行の京都YWCAのニュースレターや、毎月のプログラムの案内チラシをお渡ししている。音楽会や講演会など、興味を惹かれるテーマを選んで参加される方も多い。

YWCAの平和委員会主催のプログラム「カフェフリーデン」で、入居者2名に戦

争体験を語っていただいた。他の入居者も観客となって参加され、新聞で予告されたこともあり外部からの参加者もいて、若い世代や地域に向けて発信する場となった。また、会館で行った防災訓練は、居住者自身の安全の問題でもあり、毎回何人か参加されている。

一方、親と子の育ちを支援する委員会では、高齢者の方に小さな子どもに昔遊びなどを教えていただくプログラムを企画したが、居住者の都合が合わなかったため、今のところ実現していない。

国際委員会とうららかふえ運営委員会が共催し、留学生たちも参加した「そば打ち」の会では、一人の入居者が70歳より習い始められたフルートを演奏された。また、別の入居者のお孫さんからの「おばあちゃんに聴いてもらいたい」との申し出を受けて、お孫さんが参加している若者のバンドにYWCAのクリスマス会に出演してもらい、多世代交流が実現した。

YWCAでは毎月大量の案内物の発送を月初めに行うため、発送作業のお手伝いを必要としている。ボランティア活動による社会参加として発送作業への参加をお誘いした。発送作業は立ち作業も多く高齢者には向かない面もあり、また、それぞれの時間の都合もあり、作業に参加できたり、できなかったりという状況である。料理が得意で配食経験も豊富な入居者が毎月数回カフェでも料理を担当されているが、他の入居者は体力的にカフェの手伝いは難しいと思われる。

発送作業のような「作業」を希望される方もいれば、上記のようにカフェのランチ提供の「リーダー的役割」を担う方もいる。また、イベントの参加者を前に、これまでの経験を語っていただく方もいる。一方、年齢的に新しいボランティアを始めることにハードルを感じている方もいる。

入居者個人の経験や関心、現在の健康状態、体力に応じたボランティアの機会を提供することが必要である。

1.2.2 地域との関係

○ 町内会との関係

入居者も町内の一員として町内会に入り回覧板などを回してもらおうと町内会長に相談したところ、会館が所在する町内では、交流等の行事がほとんどないので町内会費を払って加入してもらうのは申し訳ないとのことであった。回覧板のみ入居者へ回している。当町内は住民も少ないため、普通の町内のような町内行事がない事情にある。

○ 京都市上京区地域介護予防推進センターの出張塾

サラームを始めるに当たり、入居者を含めた地域の高齢者向けのサービスを提供したいと考え、京都市上京区地域介護予防推進センターに相談したところ、2015

年4月よりYWCAの会館の一室で、同センター主催の「健康教室」（月1回午後）と「元健康教室の参加者サークル」（週1回午前、脳トレ、栄養・食事、口腔ケアなど）が始まった。近隣の高齢者が30名近く参加されており、入居者の地域の人との出会いの場と期待される。現在のところサラーム居住者1名が参加されている。

1.2.3 入居者の自主活動

○ クリスマス会

入居者が会員ボランティアや職員を招いての自主クリスマス会が2年続けて行われた。料理の得意な入居者が食事を用意し、他の入居者がセッティングなどでお手伝いして行われた。日頃食べたいと思っていた料理を食べ、差し入れのケーキなどで楽しい交流の場となった。



入居者によるフルート演奏（クリスマス会）

○ ガーデニング

本館2階にあるサラームのフロアからアクセスできるホール屋上に野菜を植える試みが行われた。野菜作り経験の豊富な居住者とサラーム運営委員が苗や種を買ってきて植えた。入居者は収穫については大変喜ばれたが、体力的なこともあってか、毎日の水やりなどを積極的にされる他の入居者はいなかった。以後は野菜作りやガーデニングは、サラームとして取り組むというよりも、好きな入居者が自主的に実施する方向とした。

○ もの作り

2人の入居者が「これまでの経験を活かして何かYWCAでできること、貢献できることは」と考えられ、共同の居間でエプロンづくりに取り組まれるようになった。この作業のため、他の入居者の方がミシンを寄贈され、また、別の入居者は、できた作品を試着する「モデル」として協力されている。作業後は、茶菓子を共に味わいながらのおしゃべりの時間になっている。会員や職員も時折邪魔している。YWCAの初夏のバザーではその作品を入居者自身が売り子となって販売し、好評を博した。バザーは市内各所からお客様が来場されるため、入居者の地域デビューの場となった。うららかふえ運営委員会からのヘアーキャップ製作の注文もあり、意欲的に製作に取り組んでおられる。

○学び

入居者の一人は 70 歳から始めたフルート演奏を会館の一室を借りて練習されている。クリスマス会やイベントでも披露され、その前向きな学びの姿勢は周囲を感嘆させている。また、YWCA が実施している英会話を学ぶ入居者もいた。

1.3 「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」の視点から

1.3.1 出会いの場としてのカフェ「うららかふえ」

高齢者にとって毎日の食の問題は生活の最も重要な要素の一つである。前述のとおりカフェはサラーム居住者にとって、食事の場であるだけでなく、人と出会う居場所となっている。日替わりでカフェ担当者も変わるため、さまざまなボランティアや会員やお客さんと出会うことができる。ボランティア側にとっても居住者と親しくなる機会である。

1.3.2 「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」への寄与

YWCA では多くのシニア世代がボランティア活動をしているが、活動が終わると各自の自宅に帰っていく。「会館を住まいにしている高齢者」の存在は、会館で活動する者にとっても新鮮である。YWCA を信頼し、安全・安心な住まいとしてここで老後を送ることを選択されたということの意味は大きい。職員やボランティアは、その信頼に応えて事業も活動も持続可能なものにしなければならないという自覚を高める契機となっており、ボランティアのモチベーションにもつながっている。

あるサラームの居住者のお部屋は、ご本人も YWCA の会員であることもあって、ボランティア活動の合間や活動後にお邪魔してくつろぎ、親交を深める場となっている。これは活動の場と居住の場が同じ建物の中にあることにより実現できたと言える。

1.4 事業開始から 1 年半を終えて

サラームの部屋数は 8 室であり、8 名の入居者から高齢女性一般を論ずることはできない。各自固有のライフスタイルを持ちながら入居されており、生活パターンも多様である。サラームではそのライフスタイルをできるだけ尊重することを基本方針にしているが、サラーム運営委員会が 3 ヶ月に 1 度程度の頻度で催す交流会は入居者に楽しんでいただいている。適度な頻度やタイミングの交流企画が効果を挙げていると思える。

一方、YWCA は若い人からシニアまでが集い、さまざまなイベントや学びの場を提供していることから、入居者が人々と出会い、関係を築く場になっていることは確かである。入居者自身の選択で自主的に YWCA のプログラムに参加されたり、好きなとこ

ろに外出されて自由な生活を楽しんでおられる。

留学生や自立援助ホーム利用者や若いお母さん方との交流も、今後いろいろな機会を通して良い関係が生まれることが期待できる。

一方、リーダーシップをとる入居者がいるお陰で実施できている交流も、入居者の組合せによっては違うものとなるかもしれない。リーダーシップをとる人がいない場合に、それぞれの自主性を引き出すための別の工夫が必要かもしれない。野菜作りやガーデニングやその他の趣味の活動も入居者次第であり、時間的にも長いスパンで見えていく必要があると思われる。何よりも、入居者の意思や、それまで生きてきた生活のスタイルを大事にしつつ、自然な形で人間関係を広げていかれる場としていきたい。

今後、医療や介護を受ける方が徐々に増えることが予想されるが、自ら介護や医療サービスを提供しないサラームが、どのような役割を担うべきかについても、サラーム運営側の重要なテーマとして検討していく必要がある。サラームでの生活が困難になられる方も出てくる可能性も視野に入れて、職員やボランティアは研修や学びを続けていく必要があると思われる。

「地域包括ケア」の視点からは、サラームに入居されている方々と地域の人たちとの関係構築も欠かせないが、現時点では町内会、自治会とのつながりは、まだ希薄である。この点もこれからの課題と言える。

2. サラームに居住する人々

本節では、京都 YWCA サービス付き高齢者向け住宅サラームに契約・入居されている方々の契約・入居に至る経緯や入居後の生活の様子を述べる。このうち、「それまでの人生」は2015年～2016年に行ったヒアリング等でご本人に語っていただいた内容を要約したものである。（お名前はすべて仮名である）。

美智子さん

契約時の年齢：84歳

既婚（夫とは死別）

要介護度：入居時要支援2

契約時の居住形態：賃貸住宅 独居

契約の経緯

教会でサラームの案内を見て息子さんと娘さんが申し込まれた。独居で不安な時は知りあいに電話を頻回にかけたり、自身が教えていた手工芸の教室の会計でミスが多くなってきていたり、訪問販売で高額な商品を購入させられたりするなど、見守りがないと自立が困難と判断され申込みに至った。ご本人は、自宅やこれまでの生活に愛着があり、引っ越すことに抵抗と不安が大きかったようである。

サラームでの生活状況

お一人ではサラームへ転居して新しい生活に移ることは難しいので、申込み当初、息子さんはご自身が長期休暇をとって、ご本人としばらく「慣らし生活」をしようと考えておられたが、実際には息子さんは多忙で休暇を取るのが難しく、「慣らし生活」は実現できなかった。時々は一人でタクシーを利用しサラームに来館して1日過ごされたり、1泊して帰られたりすることもあったが、新しい生活を始めることに不安感が強く、入居には至らなかった。

千代子さん

入居時の年齢：75 歳 / 入居時期：2014 年 9 月

未婚

要介護度：未認定

入居時の居住形態：賃貸住宅 独居

それまでの人生

東京都出身。戦争中に京都に疎開した。その後はほぼ京都で生活している。学校を卒業した後、いくつかの企業や団体に勤めた。YWCA でも職員だったことがある。

YWCA にはずっと関わってきた。私にとって YWCA は大きな存在だったと思う。YWCA が女子宿舎だった頃に住んでいたこともあるし、サラームに入ったのも、「よっぽど YWCA が好きなんですね」と言われるけれど、そうかもしれないと思う。意識を啓発されたのもいつも YWCA だった。そのことを、YWCA 以外の場所でどれだけ活かすことができたのか、いつも気になっていた。

京都市北部にある岩倉に住んでいたが、サラームに来ることになって、それまでの生活に大きな変化が起きた。持ち物の整理から始まり、今まで獲得し培い身につけてきたものを取っていき、身軽になったと喜んだのもつかの間、今はなんだかはぎ取られたとの想いが強い。30 数年来の大原の畠も車も手放し、行動半径も狭くなってきたが、少しずつ身の丈に合った生活をしていきたいと思っている。サラームの事業開始に関わってきたのでサラームに入ることは自然のなり行きだった。

振り返ると、私の人生は行き当たりばったりで歩んできたような気がするが、恵まれた感謝すべき歩みであったと思う。多くの友人に恵まれ、何事にも自由に生きてこられた（お金には不自由であったし、これからもそうであろう）。

ここでの生活がどのようなになっていくのかよく分からないが、死ぬまで付き合わなければならないのは、自分である。自分と楽しく付き合う術を模索していかなければ。

入居の経緯

過去に京都 YWCA の宿舎に数十年住んでおられた。8 年間ほどは別の所で生活されていたが、サラームには計画段階から関わられ、事業開始と共に入居された。京都 YWCA の元職員であり、現在は会員。長く京都 YWCA の活動や事業に関わってこられた。

サラームでの生活状況

京都 YWCA の会員であることや、長く活動・事業に関わってこられて京都 YWCA をよく知っておられること、面倒見の良い性格もあり、サラームでは中心的な存在である。

入居後しばらくして、京都 YWCA で担っていたいくつかの委員会を辞退されたり、YWCA 以外の活動で、コーラス等いくつかの活動を整理されたが、うららかふえで料理ボランティアとして月 1、2 回活動を続けるほか、小学生に居場所を提供する委員会（「ガジュマルの樹」運営委員会）の委員でもある。居住者主催のクリスマス会の発起人で、入居後、初めての正月には 4、5 階の留学生にも声をかけて、自室やサラーム居間で雑煮会を開かれた。うららかふえの建物の南玄関の花壇や中庭の花の手入れを担ってくださっている。身の回りのことはすべて自身でしておられる。友人も沢山いて外出も多い。

和子さん

入居時の年齢：83 歳 / 入居時期：2014 年 9 月

既婚（夫とは死別・子ども 2 人）

要介護度：入居時要支援 2 → 同年 12 月に要介護 1 へ

その後、2015 年 3 月要介護 5 に変更

入居時の居住形態：持家 独居

それまでの人生

神戸生まれ神戸育ちで、神戸から出たことがなかったので、今回が他府県での生活は初めてである。祖父母にかわいがられて育った。過保護であり外に出してもらえなかったのが、短期大学に合格した時は往復の道に自由があるので嬉しかった。短大を卒業して保育園に勤め始めてすぐに夫に出会った。牧師が保育園に連れてきて、それがお見合いだった。すぐに結婚した。

子育てが忙しかったりして教会に行けなかった時期もあったが、ずっと教会そのものにはつながっていた。夫もキリスト者だし子どもたちにも幼児洗礼を受けさせている。ここは教会も近くてうれしい。

3年前に夫を見送った。夫はお酒が好きな人で痛風だった。脳梗塞を起こして入院したが、看病をしている間は自分はすごく元気で「ハッスル」していた。その疲れが出たのか、1年前から肺を悪くした。昔、肺結核に罹患したせいかもしれないと思う。サラームに入ろうと思ったのも身体に自信がなくなったから。ここは娘が探してきてくれた。

たくさん思い出があるから前の家を手放すことができない。夫が亡くなり、お友達とも離れて寂しい思いはある。でも、夫は天国から見てくれていると思うし、お友達とはメールで連絡を取っている（カッコいいでしょ?）。お友達は泊まりに来てくれたり電話やメールをくれる。教会の人たちもお手紙をくれる。

ここで日々の生活が少し変わった。前は何もしなければテレビがお友達の毎日だったし、ご近所に行くにも靴を履いていかなければならなかった。でも、ここなら数歩でお隣に会えるし気楽。大きな施設じゃなく家庭的で、皆さんの笑顔が素敵で、ここはとても気に入っている。新しい出会いがあるのもうれしい。

ランチが楽しみ。栄養が行き届いているし、七分づきのご飯も大好き。音楽が好き。このプログラムも選んで参加できるので嬉しい。手先のことも大好き。ベッドカバーは手作り。少しずつ、好きなことをしていけたらと思っている。

入居の経緯

京都在住の娘さんがサラームの案内を入手された。和子さんの神戸市での独居生活が難しくなっていたので京都市内での高齢者向け住宅を探され、申込みに至った。

サラームでの生活状況

娘さんの希望としては、自宅では一人で居ることが多いので少しでも人と会話ができる環境で生活して欲しい、ということであった。

入居直後は寂しさを訴えておられることもあったが、オリエンテーションに参加されたり、昼食はうらかふえを利用されたりするなかで、他の入居者の方々と仲良くなられた。YWCA 主催の講演会やコンサートにも参加し楽しんでくださっていた。他の入居者の方が YWCA のバザーに出店するため手作り品を居間で作られることを知り、ミシンや布を提供してくださった。お部屋の中は大好きな植木やお人形などで飾られ、短期間のうちに和子さん好みの部屋になった。

お一人で外出されることはほとんどなく、日々の生活は週 1 回の訪問看護、週 2 回のヘルパー訪問のサービスを受けられるほか、娘さんが週に 2 回は必ず来訪されていた。また、娘さんとは外食や旅行に出かけられることもあった。入居後、初めての年末年始は娘さん宅で過ごされていた。

入居当初は要支援 2 であったが、6 ヶ月後に要介護 1 の区分変更になった。入居半年程たった頃に肺炎と心不全を起こされて緊急入院された。入院直後に「サラームに帰りたい」とおっしゃり、サラームを「自宅」として愛着を持たれていた。入院中に要介護 5 へ区分変更になった。約 1 ヶ月後退院し、サラームに戻ってこられた。24 時間の酸素吸引が必要となり医療機器の装置が部屋に設置され、毎日 3 回のヘルパー訪問、ソフト食、週 2 回の訪問介護と訪問リハビリ、月 2 回の往診を受けられることになった。

退院後、少しずつ体力を回復されていたが、1 ヶ月後には肺炎で再入院、1 ヶ月後に退院。嚥下機能も少しずつ回復し、見守りがある中で、普通食を少し召し上がれるようになった。2015 年秋の交流会や、同年 12 月の入居者の方が企画したクリスマス会にも参加された。

入居されて 2 度目の年末年始も娘さん宅で過ごされたが、サラームに帰宅の翌日に肺炎、心不全を起こされて緊急入院された。前回の 2 回よりも早急に入院の判断をされたこともあってか、3 度目は 2 週間で退院された。

体力、気力的に衰えが目立ち、退院後は 24 時間契約の警備会社のボタンをナースコールと混同して押されたり、事務所に電話をかけてこられることが約 1 ヶ月ほど続いた。以前は一人で出来ていたことができなくなったり、ヘルパーが来るまで援助を待つことが困難になった。娘さんはサービス付き高齢者向け住宅での生活に限界を感じられ、介護付の施設を申し込まれた。また、本人もサラームに住み続けたいと希望されつつ、24 時間の介護がないことに不安を感じられ、別の施設に入居を希望されるようになった。(2016 年 4 月に他の施設に転居された。)

由紀子さん

入居時の年齢：82 歳 / 入居時期：2014 年 9 月

未婚

要介護度：未認定

入居時の居住形態：持家（マンション） 独居

契約の経緯

京都生まれ京都市育ち。早く家を出たかった。「自立」、「自由」をひたすら求めていた。

学校を卒業してすぐ家を飛び出し、大阪 YWCA に就職。5 年後、東京の日本 YWCA に移った。その後、定年退職するまで東京で働いた。総幹事職に就いたこともあった。その後、大阪 YWCA に戻り、YWCA の専門学校で働いた。ボランティアとしてさまざまなことに関わり、YWCA と共に歩んだ人生だなと思う。

職責もあり学びもありで、さまざまな国に行き、世界中に友人がいる。でも中国に先に行ってしまったから韓国には行ったことがない。1960～70 年代当時、日本も韓国も中国も組織に属する者に対して目が光っていた。思想の問題はとても厳しかった。中国に行ったことがある者は、韓国に行く手続きをすることさえできなかった。最近は、機会があればサラームで管理人として住んでいた韓国人研究者の所に行こうと考えている。初めて韓国に行けそうなのでとても楽しみである。

70 歳になった時に責任あるポジションからすべて身を引いた。「本人が言わなければ、他人からは引けというのは言いにくいものだ」という言葉に触発され、自分の判断に任せずに年齢で決めて線引きをするということが必要だと思った。委員会などのメンバーになるのはいいが、委員長などは引き受けないと決めていた。その後はボランティアとして過ごしている。

キリスト教会に所属している。両親ともにクリスチャンで、自分もクリスチャンになった。東京から大阪に帰ってくるとき、大阪 YWCA と教会のある京都との間に住もうと思い、京都市の南部を選んだ。マンションでも理事長などをしながら地域の人たちとの交流をしていたが、段々と一人で暮らすということに不安を感じるようになった。大阪 YWCA が経営するケアハウス「シャロン千里」に申込みをしていたが、大阪にいる必然性がなくなった。実家のある京都に住んでもよいと考えていた時にサラームの情報を得たので、ここだ！と思った。現在、とても満足している。精神的・経済的に自立した人たちの集まりと感じている。今、愛子さんと相談しながら、手芸などの作業を一緒にしたいと思っている。

入居の経緯

大阪 YWCA 運営のケアハウス「シャロン千里」に申し込んでおられたが、京都 YWCA でサービス付き高齢者向け住宅「サラーム」を開設することを知り申し込まれた。

サラームでの生活状況

入居当初は引越しの疲れが出て足腰を痛められ、あまり外出されない日々が続いたが、それでも 2 ヶ月後には兵庫県の温泉へ友人と旅行された。以降、3、4 ヶ月に一度、友人と 1 泊 2 日ほどの国内旅行に出かけられている。初めての年末年始は京都市内のご兄弟宅を訪問された。翌年の 2 月からは友人の紹介で整形外科を受診し、リハビリに通われる。何度かヘルパー利用についてお勧めしたが、「大丈夫」とのことで要介護申請には至らなかった。転居から約 1 年ほどで日曜、木曜と所属教会に通われるようになり、また、同じ教会の病児保育のボランティアに週 1 回行かれるようになった。

YWCA では昼食は入居当初からうららかふえを利用されることが多い。うららかふえが営業していない日は、サラームの他の入居者の方と「ランチツアー」と称して、近くのレストラン等に出かけられている。また、京都 YWCA の講演会、コンサート等にはよく参加されている。

2 階の居間では手作りの布製品（主にエプロン）を作って、京都 YWCA のバザーに出店されている。お店の屋号は「野いちご」。これは別の入居者が付けた名前である。

YWCA の職員として働かれた経験を、是非、サラームの入居者の方たちだけでなく、YWCA に集う若い人たちに話していただきたいとお願いしている。

明子さん

入居時の年齢：73 歳 / 入居時期：2014 年 10 月

未婚

要介護度：未認定

入居時の居住形態：賃貸住宅 独居

それまでの人生

福島に生まれ、高校まで福島にいた。今回の震災時にいなくてよかったと思ったけれど、心が痛い。

子どもの頃から体力がない。大きな病気をしたわけでもないが、小さい頃からプールにも入れないくらい体力がなかった。仕事をしていた頃は、仕事のためだけに体力を使わないとすぐばててしまっていた。このままだと仕事を辞めたら死んだみたいになってしまおうと思い、それは嫌だったので 60 歳になる前に辞めたけれど、すごくしんどかった。慎重に生きてきたけれど、生き方を変えてみよう、最後に好きなことをしようと思った。

年に何回か京都に来ていたうちに、京都に住みたいと思うようになった。気楽な感じで来てしまい、周りの友達も驚いていた。京都での生活は 6 年目になる。

その頃、介護認定に関する訪問があったり、いろんな訪問販売が来るようになり対処に大変だった。歩けなくなったらどうしたらいいのかなど、いろいろな不安も重なった頃、サラームのことを知った。

引越しは一人で全部しなければならなかったから、すごく大変だった。

食事は自分で作っている。食べることは放棄したら、人間を放棄した感じになる。

薬はあまり好きではない。抗生物質を飲んだら胃腸がやられて入院した。薬は飲めないで食べるものとか眠ることに気をつけている。

音楽が好きなので、いろんなイベントのお誘いをいただくのは嬉しい。東洋医学には興味がある。京都の名所は大体回ったので、御所を散歩したりとかして今は少しゆっくり過ごしている。

入居の経緯

以前から京都 YWCA のリサイクルセールやシルバーコーラスに参加されていた。ご兄弟が関東方面にいるが、京都近辺にご家族はいない。京都 YWCA 会員に親しい人がいる。これから京都で住み続けるにあたり、安心できる住居に転居したいとの希望で申し込まれた。

サラームでの生活状況

入居後ほどなくして関東方面へ旅行に行かれた。地域介護予防推進センター主催の月1回の介護予防講座や、毎週1回の公園体操に積極的に参加されている。公園体操で知り合った方の自宅へ招かれたり、うららかふえで知り合ったあじさい寮の留学生と食事の際おしゃべりをされたりしていた。「サラームに来て人と話すことが多くなった」とのことである。

夕食、買い物、洗濯、掃除など身の回りのことは自身でされている。胃腸が弱かったり、歯の具合が悪かったりされるが、健康への意識が高く、さまざまな医療を試された結果、ご自身に合った医療を選んで治療されている。

また、四季折々に楽しめる観光名所をご存知で、出かけては楽しんでおられる。サラームの他の入居者の方と親しくなられ、うららかふえの休みの日は、一緒にレストラン等へ食事に行かれたり、買い物に出かけたりされている。

愛子さん

入居時の年齢：89歳 / 入居時期：2014年11月

未婚

要介護度：未認定

入居時の居住形態：ケアハウス

それまでの人生

岡山市生まれ、岡山育ち。小学校卒業前に父が病死。女学校卒業後、東京の親戚宅から女子美術学校に通っていた。戦況が厳しくなる中で、母の元に帰るようと言われ、岡山に帰った。徴用される前、父親の縁を頼って銀行に勤めた。昭和20年6月、B29の空爆で焼け出され、高粱の親戚から岡山に通勤した。勤めがあつてありがたかった。8月15日敗戦。これまで教育勅語の下での軍国少女だったので、日本が敗けるなど考えもしなかった。これまでの教育は一体なんだったのか、これからどう生きればよいのか、迷い悩んだ。

倉敷に落ち着いてから教会の門をくぐり、2年後、洗礼を受けた。

少しでも給料の良いところと転職したが、生活も落ち着き、妹も母も勤め始めた頃、もう一度学びたいと思い上京した。不思議な女性の先生との出会いから、先生の書生になり、研究生活に入った。思いがけず、先生が癌で死去。道に迷った。関係していた先生の下で学び、紹介された静岡に赴任。10数年勤めた。

東京の教会に転会したとき由起子さんに出会い、それ以後、50年近くの友だちである。一緒に住めるようになったことは、全く不思議である。

仕事を定年退職して非常勤講師になって将来のことを考えた。大阪 YWCA のケアハウス「シャロン千里」のことを由起子さんから聞き申し込んだが、非常勤の仕事があってもなかなか移れなかった。ちょうど後任が決まった時にシャロンから連絡があり、シャロンへ移った。東京の教会から由起子さんのいる京都の教会に転会し、日曜日には通っていた。シャロンから教会に通うのは遠いのでスタッフも心配していた。サラームのことを聞いた時、教会に近くなることが一番だと思った。サラームは自室にお風呂があることもよかったと思う。

食事のことはみんなが心配してくれたけれど、70歳の時に乳がんを患ったことをきっかけに自分なりに食事のことは考えるようになった。自分で整えていくのも楽しい。

サラームに移って少しずつ落ち着いてきた。環境が良いし生活のリズムも整い、部屋も自分の雰囲気になってきた。70歳で習い始めたフルートの練習をここでも続けたい。布がたくさんあるので、それで何か作ってお役にたてばと思っている。

入居の経緯

大阪 YWCA のケアハウス「シャロン千里」に住んでおられたが、毎週日曜日は京都にある所属教会に大阪の千里から通っておられた。教会の近くで生活することが希望で、サラームに入居された。

サラームでの生活状況

毎週、月曜日と金曜日は京都 YWCA の別館のサマリア館の1室でフルートの練習をされる。日曜日は教会の礼拝に出席、木曜日は所属教会の聖書研究会に参加されるという規則正しい生活を送られている。また、月に1、2回は大阪へフルートのお稽古に行かれる。70歳からフルートを始めた意欲には、サラームの入居者だけでなく YWCA の多くの人たちが勇気をもらっている。

ほぼ毎日、昼食はうららかふえを利用されている。昼食以外の食事はご自身で簡単なものを作って召し上がっている。

京都 YWCA 主催の講演会やコンサートによく参加されている。また、2015年8月の京都 YWCA 平和委員会のカフェフリーデンでは自身の戦時中の体験を話され、10月の国際委員会主催のそば打ち交流会や12月のサラーム

ムのクリスマス会ではフルートを演奏され、2016年3月の小学生対象のプログラムでは戦争体験について話されるなど、京都YWCAの活動に協力していただいている。

入居の申込時点では申込者の中で最高齢であり、既にケアハウスで数年生活されていたのでサ高住に転居されることへの周りの不安があったが、新しい環境にもすぐに馴染まれ、1年半が過ぎようとしているが元気に過ごされている。

同じく入居されている由起子さんとは長年の友人関係であるが、他の入居者の方とも親しくなられ、食事や買い物に一緒に出かけられている。

安否確認の機器や、温水器、IHの操作など、説明書を読んで理解し操作されるなど、新しいことを学び習得する意欲をもたれている。

雅代さん

入居時の年齢：85歳 / 入居時期：2014年11月

既婚（子ども2人）

要介護度：入居時 要支援2

入居時の居住形態：持家（マンション） 独居

それまでの人生

東京都大田区出身。10歳の時に父の仕事のため、中国北京へ。現地の日本人小学校で学ぶ。戦時中は防空壕を掘ったり、英語の授業もなくなり、冬は北海でスケートをしたり、病院で看護術を学んだりしていた。多くの日本人とともに終戦を迎え、避難生活を共にしながら昭和22年5月に17歳で日本へ帰国した。

20歳で医師と結婚。土地の分割の抽選が当たったので家を建て開業したところ、その日から患者さんが来られた。昼間は別のところで勤務しつつ、夜6時から8時まで診療となり多忙になったが、人生の充実感を味わう日々であった。

両親が80歳を過ぎた頃、介護のために実家を往復。3年後に心身の疲れでダウンし、晩年の両親と暮らすことになった。

横浜で働いていた頃、聖書との出会いがあり、挫折と失意の中で教会に通うようになった。多くの人の祈りと神の愛に導かれて信仰が与えられた。自分は悪いこともしてきた人間だが、キリストの死によって赦され、心に平安が与えられた。

教会の近くにサラームがあることを友人が知らせてくれ入居にいった。良い人間関係のなかで、心から感謝の毎日を過ごしている。

入居の経緯

京都 YWCA 近くの教会に通われている。入居前には週 1 回ヘルパーのサービスを受けておられた。過去の骨折から歩行の際ふらつきがあり、重い物の買い物などをヘルパーに依頼されていた。ご家族が関東方面に在住のため、独居に不安を感じておられた。ケアマネージャーからは「日常的な見守りがあると不安が軽減され、より安定した生活が続けられると見込まれる」とのコメントを受けている。

サラームでの生活状況

申込み当初は、自宅と往復しつつも 2、3 ヶ月後にサラームへ住居を移される予定だったが、教会の祈祷会、礼拝がある日にはサラームに来られ、そのほかは自宅で過ごされる日が続いていた。寒くなると体調を崩されることもあり、サラームへ完全に転居される日が延びていた。契約後も、しばらくは自宅で週 1 回、介護サービスでヘルパーの家事支援を受けておられた。

春に息子さんが雅代さんの自宅に転居してこられることになり、準備のため自宅におられることが多くなった。転居後も、久しぶりの息子さんとの同居が嬉しいとのことで、自宅とサラームを往復されている。夏前に住民票をサラームに移され、週に 1 回サラームからリハビリ中心のデイサービスに通われるようになった。同じ頃に、以前から関心があったとのことで、YWCA の英会話を受講されたり高齢者向けヨガを体験された。

隣の居室の方と仲良くなり、うららかふえで一緒に食事をしたり、教会へ行かれたりしている。デイサービスの利用で脚力が回復してきたとのことである。デイサービスや YWCA で過ごされることで自宅より人と会話をする事が多くなったと喜んでおられる。「人と話すことは大事ね」との感想であった。

秋の交流会や 2 度のクリスマス会には出席された。特に秋の交流会でみなさんと御所で紅葉狩りをしたのがとても楽しかったと何度もおっしゃっていた。

1 年過ぎた頃、外出先で転倒され、しばらく自宅で過ごされていた。また、2 度目の年越しの際、過労と冷えから、朝目覚めた際に首が動かなくなり、息子さんの同行で病院受診。サラーム入居の前から教会での役割を担っておられ、入居後も引き続き、教会関係のことでも忙しくされている。

関東在住の娘さんからは、入居後、何度か電話や手紙をサラーム宛に頂いて、遠方から気にかけておられる。

恵子さん

入居時の年齢：80 歳 / 入居時期：2015 年 1 月

既婚（夫とは死別・子ども 2 人）

要介護度：入居時 未認定 2015 年に要介護 2 の認定

入居時の居住形態：賃貸住宅 独居

それまでの人生

過去の仕事はグラフィックデザイナー。夫は陶芸家で恵子さんも夫の仕事を手伝い、陶芸の指導ができる。入居前は京都府の北部に居住されていた。絵手紙が趣味だった。

入居の経緯

サラームに申込まれる前に、京都市外の病院で手術を受けられ、以降、娘さんが住んでいる京都市内のマンションで療養されていた。高齢で大病をされたこともあり、娘さんが、自身の自宅近くで見守りのある住宅で恵子さんが生活をされることを希望され、申込みに至った。ご本人は見学、面接に来られた際、「ここに住みたい」と強く思ったと、後に話してくださった。

サラームでの生活状況

入居前は介護認定を受けておられなかったが、居住していた地域の社会福祉協議会から掃除援助や買い物代行などの生活支援を受けておられた。身体面ではいくつかの疾病があり、病院にかかれており、転居を機に、病院を京都市内の病院に移された。

散歩がお好きで、介護認定を受け、介護サービスが始まるまでは、毎日、朝夕に散歩に出かけられていた。

入居 1 ヶ月半後に病気が判明し、約 1 ヶ月入院。退院後、入居直後より検討されていた介護認定を受けられる。しばらく週 1 回のデイサービスと週 1 回の訪問看護を受けておられたが、その後、週 2 回デイサービス、週 2 回ヘルパー支援、週 1 回訪問看護を受けられるようになった。

介護認定前は、ご本人の身のまわりのことはすべて娘さんが担っておられたが、認定後はヘルパー、訪問介護により少し娘さんの負担は軽減されたようである。

うららかふえの昼食をととても楽しみにされ、デイサービスで食事される以外

はうらかふえを利用されている。「普段はなかなか食べられないメニューがあって、楽しみ」と言ってくださっている。サラームでは隣の方と仲良くなられ、うらかふえと一緒に昼食をしたり、教会へ行かれたりしている。また、他の入居者の方、YWCA の職員に対してもとても良い印象を持ってくださっているようで「みなさん、とても優しく穏やかで気さくで感謝している。」とのことである。

サラームの春、夏の交流会、冬のクリスマス会に参加されたほか、YWCA でのコンサート、講演会にも時々参加される。特に月に 1 回のリサイクルセール、年 2 回のバザーでは洋服や雑貨のお買い物を楽しんおられる。バザーの際、「お世話になるだけでなく、できることがあれば是非やりたい」と申し出られ、バザーのチラシを熱心に折ってくださった。

YWCA のクリスマス会では、恵子さんの娘さん、お孫さんの申し出で、お孫さんのバンドにボランティアで演奏してもらった。サラームの他の入居者、YWCA の会員、ボランティア、職員など、参加者みんなが演奏を楽しみ、みんなでの合唱となり、大変好評であった。クリスマス会では、入居者の方と職員とのつながりだけでなく、入居者の家族、会員、ボランティアと楽しい時間を過ごすことができた。

昌子さん

入居時の年齢：89 歳 / 入居時期：2015 年 7 月

既婚（夫とは死別・子ども 2 人）

要介護度：入居前に要支援 1 の認定を受けておられたが、サービス利用はなく、

その後更新されなかったため、入居時、入居後も未認定

入居時の居住形態：賃貸住宅 独居

それまでの人生

兵庫県出身。空襲で家を焼失し京都へ。女学校卒業後は東京の大学へ進学が決まっていたが、戦時中のため工場で奉仕した。終戦後に京都の家が進駐軍に接收されたこともあり、両親の勧めで東京へ復学。国文科専攻で卒業後京都へ戻り、女子中学、高等学校の国語の非常勤講師になる。その間、京都 YWCA が行っていた主に西陣の女工さんたち対象の「生活学校」で、手紙の書き方などの指導をした。「生活学校」には常時 20 名ほどが通っていて料理教室などもあった。

昭和 21 年頃に京都で教会に通う。終戦後、物が無い時代に同世代の方たちと食事を共にしたことがとても楽しかった。その後、洗礼を受ける。

結婚し夫の仕事で東京へ移った。2児の母となったが、大学等で非常勤の教職についていた。昭和35年頃、夫の仕事でサンフランシスコへ行き1年間過ごした。まだ日本が敗戦したことを強く感じる時代であった。

50代の頃、ベトナム難民の人たちに日本語を教える仕事をした。ベトナム難民の方々は中高年で「勉強をしたい」と意欲を持てる状況でもなく、日本語を教えるのはとても難しかった。その後、中国、韓国の留学生に日本語を20年ほど教えた。50代の頃はまだ若く意欲もあり、さまざまなボランティアをした。まず、「いのちの電話」の立ち上げに関わった。5年間、夜8時から朝8時までの相談ボランティアをした。調停員や保護司のボランティアもした。仕事もボランティアもいつも周りが誘ってくれた。周りに恵まれていたと思う。誘われると「やってみよう」と思って取り組んできた。夫は仕事やボランティアをすることに全く反対しなかった。ボランティアで経験したことを話すと「そうか、そうか」と聞いてくれた。子どもたちに淋しい思いをさせたこともあるかもしれないが、よく育ってくれた。

夫が病気になったことを機に、落ち着いて治療に取り組める京都に転居した。数年間を京都で過ごしたが、息子が「離れているととても心配」と言ってくれたので、息子のいる東京へ。夫の介護は13年した。夫と死別後、自身の病気の治療のため、信頼できる医師がいる京都へ戻ってきた。夫と居住していた頃、通っていた商店の方と親しくしている。慣れたお店がいくつかあるので、今でもそこで買い物をしている。

京都で初めて勤めた中学、高校の教え子、同僚とは今も親交がある。教え子とも4、5歳しか離れていないので、教え子の方が亡くなったり、同僚の方が亡くなるのはとてもつらい。サラーム入居前に姪が突然亡くなったのが最近では一番つらかった。仕事をしていた姪からいろいろな話を聞くのがとても楽しかったし、京都で暮らすにあたって頼りにしていた。

自分もいくつか病気を抱えているが、あまり考えないようにしている。医師とはよく話し合い、今の状態が悪くなっていないかのチェックだけ受け、あちこち触って「治療」しようとは思っていない。あと10年若かったら京都YWCAでもボランティアをしたいと思うが、今は病床の友人や一人暮らしの友人を訪ねたりすることに忙しい。

入居の経緯

サラームに申し込まれた時点では関東から京都の別のサービス付き高齢者向け住宅に転居されて数ヵ月が経過していた。知人の紹介で住み始められたが、京都市内でも土地勘がない場所で、加えて緑が少ないことや、かかりつけ医、姉妹、親戚、友人が住んでおられる地域からは遠いこと、ビルや工場が多く、ひと気があまりなく、夜間帰宅時には不安を感じておられた。また、他の入居者が余り外出しないので、出かけにくいと感じておられた。そのような生活を送られている時に別の知人よりサラームを紹介され、20代の頃に京都YWCAの「生活教室」（西陣で働く女子向け）で国語を教えていたことを思い出されたそうである。親戚、知人、かかりつけ医がおられる地域にも近いことや御所が近く緑が多いことが理由で入居を申し込まれた。サラームで多世代の方と関わられることを楽しみにされていた。

サラームでの生活状況

入居されてからは友人や姉妹に会いに外出されたり、親戚宅に外泊されるなど自由に過ごしておられる。複数の病院にも通院されているが、食事や掃除、洗濯、買い物など身の回りのことはすべて自身でこなしておられ、入居前と同じペースで生活をされている。関東に住んでおられた際、地域包括センターから要支援サービスを受けるよう勧められて認定を受けられたが、結局、サービスを受けることはなかった。サラームに入居後も要支援、要介護の申請はされていない。

夏の交流会、2月の座談会には参加された。他の入居者の方とは交流会等でご一緒の際は和やかに交流されている。

3. サラーム居住者座談会

2月の小春日和の午前、サラームでの生活も1年以上を迎えた居住者の皆さん（8名のうち6名）に出席をいただいて、京都YWCA高齢者住宅サラームの「居間」で座談会を行った。あらかじめいくつかの質問を用意し、サラームでの生活についてお聞きした。司会（担当職員）のリードの下、お茶をいただきながら、なごやかな雰囲気の中で皆さんは日頃の思いを語られた。

（2016年2月11日実施）

サラームへの期待

司会 サラームへはどんなことを期待されて入居され、それは期待どおりでしたか？

雅代さん 通っている教会の知人からパンフレットを見せてもらい、教会に目と鼻の先なので便利と思いました。脚を悪くしてこれからの生活が不安でしたが、実際に見せてもらって、こんなセキュリティのいいところに住めたらいいと思って選びました。出会いの喜びも期待していました。今は感謝しています。

恵子さん 入った時から素敵だと思いました。

司会 恵子さんは別のところに住んでおられたようですが、娘さんがここを選ばれたのですね。

恵子さん 娘があちこち調べ、もっと広い所もあったけれど、娘の直感で間違いがないと言って選んでくれました。初めて来ていいなと思いました。他のところへ行く気はありませんでした。

司会 無理に言わなくても良いですよ（笑）。

昌子さん 前は京都のかなり西の方にある施設にいました。私は介護も受けないで出歩いていましたが、そこの施設長が心配されました。私は肝臓の病気があって、東京で何人かの医者に診てもらいましたが、6年ほど前に京都にいい先生が見つかり診てもらおうようになりました。実家が京都にあるので、どこか京都でマンションを借りようと思いましたが、80歳以上の人は購入することはできるが借りることはできませんと言われました。購入するとなると何千万円もかかります。地域包括センターに相談し、自立型の施設を勧められましたが値段は高かったです。そのうちに友人に勧められて入った先ほどの施設は家庭的で良かったのですが、私には「家庭的」というのは合わなかったようです。出かけることが多く、つい外で食事もしてしまいます。京都出身だし知り合いが多いのでと説明をしたのです

が、心配されました。そのうち友人が YWCA のホームページのサラームの情報を送ってくれて、サラームを知りました。実は私は昭和 20 年頃に京都 YWCA で教えていたことがあります。

司会 昌子さんは国語の先生だったので、京都 YWCA で西陣の女工さんたちに国語を教えておられたことがあるのですね。

昌子さん 生活学校と言っていましたが、週に何回か夕方 2 時間程こちらでお手伝いしました。中学校を出て西陣の織り子さんをしている少女たちに手紙の書き方などを教えました。私にとってここがありがたいのは、京大病院に通っているので便利なことです。

司会 YWCA との昔からのご縁とか、立地がいいとか家庭的すぎないことですね。

昌子さん 年の割に元気すぎるのも良くないのですね（笑）。以前、ケアマネージャーから支援 1 でもいいから介護保険を利用してくれと言われましたが。

愛子さん 私は 10 年前から大阪 YWCA のケアハウス、シャロン千里におりました。毎日曜に、大阪から友人の由起子さんとの関係もあり京都の教会に通っていました。いつまで京都に通えるかと思っていましたが、こちらにサラームができることを知り移ろうと思いました。教会が近くなって喜んでます。

明子さん 私は YWCA のスリフトショップ*の古くからのメンバーの知り合いですが、その方がサラームの内覧会に誘ってくれました。環境のいいところで感謝です。

* 定期的に開いているリサイクル市

司会 その前からスリフトショップに来ていただいていたので YWCA のことをご存知だったこともありますね。

明子さん そうです。

由起子さん 私は京都に生まれたのに京都嫌いでした。こんなところにいるものかと思って京都を出ました。大阪 YWCA*でシャロン千里に申し込んでいました。ひょんなことで、ここがいいじゃないかと知り合いに勧められました。大阪に通えるからいいかなと思い決めさせていただきました。入ってみて、とても快適に過ごさせていただいています。 * 由起子さんは大阪 YWCA 会員

雅代さん 私は息子が急に関東から引っ越してきて計画が狂い、今は自宅とサラームの二重生活になっています。これからどうなるか分かりませんが…

司会 教会に近い点で選ばれたのは良かったですか？

- 雅代さん 自分の教会に近く、安心な住まいでありがたいと思っています。
- 恵子さん 住んでみて居心地がよいです。
- 昌子さん 私も居心地がよいです。
- 愛子さん 私も感謝しています。
- 明子さん さみしくないです。スタッフもやさしいし、規制もないし…
- 由起子さん 京都も変わりましたね。京都から大阪に逃げ出し、大阪に感激していたので皆に笑われました。それはそれで京都を外から見直すことができて良かったです。「自立」を自分のテーマにしています。ここは自立している皆様と住める良い所です。

現在の生活

- 司会 今の生活はどのようなものですか？
- 雅代さん 私は40年ぶりに息子と生活することになり、今すごくハッスルしています。朝早く出かける息子と一緒に朝ご飯を食べるのが私の生きがいになっています。神様が最後に息子を私のところに送ってくださったのだと思います。出たり入ったりして申し訳ないですが。人から元気になったと言われます。一人で住んでいると80過ぎると周りの人がいなくなり孤独になりがちなので、今は喜んでいます。
- 司会 デイサービスに通われるようになったのも影響していますか？
- 雅代さん 良い所を紹介していただきました。毎週火曜日に送り迎えしてもらっています。
- 司会 教会のご奉仕や祈祷会にも変わりなくお通いですね？
- 雅代さん そうです。よかったです。
- 恵子さん 私は人と違う忙しさがあります。癌ができて広がっているけれど、自分が病気にかかっている感覚がありません。痛くもしんどくもないのです。大きな癌ができていたのが、この前の検診で小さくなっていました。先生は手術でなくお薬で治療する方法を選ばれ、人並みのことをしてはいけません、何事も控えめにと言われます。私を支えるチームを組まれて助けてくれています。娘やヘルパーさんにも助けてもらっています。優しい人ばかりでビックリです。楽しくて嫌な思いはゼロです。

- 司会 恵子さんはデイサービスに週に2回行かれて、ヘルパーさんも看護師さんも来られて、リズムのある生活を送っておられるんですね。
- 昌子さん 私は「病気を良くしようとは思いません、今の状態を維持するだけでいいのです」と言うと、こちらの先生はじっくり聞いてくれます。東京では肝硬変一步手前ですと言われましたが、こちらへ来てから数値が正常値に戻ってきました。精神的なものがありますね。
私は学校時代の友人が神戸に多いのですが、皆さん段々天に召されたり脚が悪くなられたりしています。私はこのごろ神戸へよく行きます。神戸教会の仲間と楽しく過ごします。そんなわけで生き残った同士が「また会う日まで」と歌って皆で泣くのです(笑)。生き残り同士で会いましょうと言って出かけることが多いです。
部屋にいる時にはメールしたり手紙の返事を書いたり読書をしたりなどしています。読書が好きですが白内障気味だと言われましたが、先生が齢だから仕方がないと言われました。先生探しに時間がかかりましたが、良い先生に出会えました。
- 愛子さん 私は自分なりの生活を続けています。
- 司会 前の施設でもフルートを習っておられましたが、今もフルートを習っておられますね？
- 愛子さん YWCAの部屋を借りて練習しています。日曜と木曜日に教会に行っています。それが生活の中心で、今まで通りの生活です。
- 司会 前の施設では3食でしたね。こちらではうららかふえのランチしかありませんがその辺はいかがですか？
- 愛子さん 前の施設では、時間になって食堂に行けば食事が用意されていました。でもそれが続いていたら、自分では作らなくなったと思います(笑)。今は食事を自分なりに何とかしていて、ここへ来て良かったです。
- 明子さん カフェで食の楽しみを発見しました。カフェのボランティアの人とも知り合いになりました。
- 由起子さん 自分としてはかなり忙しいスケジュールです。この居間は素晴らしいです。部屋にこもるよりもここに来ています。日当たりもよいですし、ここがあるととても良いと思います。

居場所食堂うららかふえの利用

- 司会 うららかふえは利用されていますか？
- 雅代さん いろいろなお国の料理がありますね。野菜や果物がついているのがいいです。
- 司会 特にご高齢向けというランチではありませんが、その点はいかがですか？
- 雅代さん 固いものは持って帰って小さく切っていただいています。
- 恵子さん 癌が小さくなっていました。先生は奇跡やと言われましたが、娘はここにいるからだと言っています。
- 司会 恵子さんの明るいご性格が癌を小さくしたのではありませんか？
うららかふえを使っていてどうですか？
- 恵子さん 楽しんでます。歯が悪いので噛み切れない時は持ち帰って切って食べています。
- 昌子さん 94歳の先輩の先生と一緒に食べましたが、美味しかったとおっしゃいましたが、量が多かったようです。高齢になると一人前食べきれません。また、メニューだけだと中身が分からないことがあります。
- 司会 うららかふえのご利用を無理に勧めているわけではなく、ご利用は自由です。
- 愛子さん 私は好き嫌いはなく、ランチがあるときは利用しています。固いものは持ち帰ったりしています。
- 由起子さん 持ち帰ってもその日のうちに食べるようにしています。ひと月のメニューが事前に分かるのはありがたいです。

人々との出会い

- 司会 サラームと一緒に住むの方々との関係はいかがですか？
- 明子さん サラームの人間関係はまろやかです。
- 由起子さん 緊張しないですね。
- 恵子さん 和気あいあいとしゃべりながら食べるのは楽しい。たまにひとりになる時は寂しい。

- 司会 春夏秋に催している交流会はいかがですか？
- 皆さん 楽しいです。
- 司会 こちらでどんな交流会をするかを考えていますが、皆さんの希望があれば言ってください。
- 恵子さん この前の御所とホテルでの食事は楽しかった。
- 司会 職員以外の YWCA の人との関わりが増えたり、始まったりしていますか？
- 恵子さん うちの孫が音楽をやっていたりしますが…
- 司会 そうです。YWCA のクリスマス会で、恵子さんのお孫さんが加わっている若者のバンドに演奏していただきましたね。
- 司会 会員の方とお話されたりすることはありますか？
- 明子さん スリフトセールとかコンサートとかでいろいろな方と顔見知りになり、お話ししますね。スリフトセールで服を買って置き場がないぐらいです。
- 雅代さん カフェで留学生の方とお話することがあります。皆さん日本語がお上手です。
- 司会 留学生との交流会など参加してみたいと思われませんか？
- 明子さん 留学生とは洗濯物の干場が同じですが、お国によって習慣が違うのか干し方が違っていて落ちていたりするので、干し方を直してあげたことがあります。その留学生とは顔を合わせなかったですが、干し方を直してあげたせいで、その後干し方が変わっていたので、その方は干し方を学ばれたようです。
- 司会 ここに住まれて新しい出会いがありましたか？
- 恵子さん デイサービスとか介護のヘルパーさんとかの出会いがあり、楽しいです。
- 明子さん 地域介護予防推進センターが京都 YWCA の部屋を借りてやっている体操教室では出会いがあります。
- 司会 今は毎週の体操教室がありますが、4 月から無料の介護予防の教室が月 1 回月曜日にあります。行けるときにお行きになればよいのです。

昌子さん 私はこんなに長く京都にいるのは初めてです。東京で仕事をしていた仲間から呼び出しがあります。YWCA で良い講演会などあっても、なかなかその日に都合がつかないことが多いです。

司会 講演会やさまざまなプログラムがありますから、いらっしゃれる時に関心のあるものにだけ参加していただければよいです。

由起子さん 去年の竹中真さんのジャズピアノのコンサートは良かったです。

イベントやボランティアへの参加

司会 こんな催しなら参加してみたいといったものがありますか？

明子さん タンゴのアストロリコのチャリティコンサートは良かったです。

雅代さん クリスマス会のフィンランドの牧師さんのお話も良かったですね。バザーは楽しいです。教会の皆さんにもバザーを案内しています。

司会 サラームに住んでいる人と一緒にやってみたいことはありますか？
こちらではガーデニングが良いかと思い準備しましたが、皆さんの関心は少し違ったのかなと感じますが。

明子さん 野菜ができるのを見るのは好きですが…

司会 YWCA の活動で何かお手伝いできると思うことがありますか？

恵子さん 私自身は手伝いたい気持ちが強くあります。

昌子さん ガーデニングは好きなのですが、膝が悪いのでなかなかできません。本当はやりたいのですが…

明子さん 初めてきゅうりができたときは本当に感激しました。

司会 ボランティアをしたいと思われませんか？

由起子さん 私はずっと大阪 YWCA のボランティアを続けています。

恵子さん 80 歳になってもできることがあると思います。

由起子さん 今はできていますが、遠方での活動はやがて難しくなると思います。

恵子さん お話をしながら手を動かすだけなら、できることがあると思います。

司会 YWCA では月 1 回、会員や会友向けの発送作業をしています。チラシ類を折るボランティアを「織姫さん」と呼んでいます、そんなことならできそうですか？

由起子さん 声をかけてくださればやれると思います。

愛子さん お声をおかけください。

司会 皆さんは世間一般のご高齢者よりもお元気ようですが、高齢者がボランティアをしたいと思っていても躊躇する理由は何だと思われますか？

昌子さん 今までボランティアをいろいろやりましたが、何曜日の何時からというふうに決められると、今は体力的にできないことが多いです。朝起きて健康状態と相談しないといけないのです。若い時に室町通りの金剛能楽堂で留学生の人にお能や狂言に連れて行くボランティアをしたことがあります。

由起子さん 修学院にある関西セミナーハウスで毎年「紅葉祭」をしています。能舞台もありますので、留学生は是非来ていただきたいと思います。大阪にいる時は数十人の留学生を連れて行ったりしました。紅葉祭は毎年 11 月 23 日と決まっています。

司会 新たなところに出かけるとか、新たな人と出会うことについてハードルはありますか？

由起子さん 皆さん、出にくくなっていますね。

司会 先ほど「生き残り部隊」とかおっしゃっていましたが、人との関係が薄くなっていくなかで、新たな関係を作っていくことの意味もあると思います。でも、齢をとると「億劫になる」ということもありますね。

由起子さん きっかけが見つからないという方がいますね。

司会 知り合いが誘うと億劫さが乗り越えられるかもしれませんね。

明子さん YWCA の知り合いからコーラスに誘われたりすると行けますね。

由起子さん 明子さんは頭の中にすごく地図が入っておられて、私は明子さんの行くところについて歩くのです。

司会 ご高齢になると周りの人が亡くなったり遠方に行かれたりと、今までの関係が希薄になっていきがちです。私たちは、ここで行われているボランティア活動にご自分の意思で参加していただいて、新しい関係をつくっていただければと

思っています。義務となるとしんどいですが。

明子さん 施設に入った方で認知症になられたということをよく聞きますが、ここでは皆さん元気になられています。でも参加時間が長時間になると疲れますね。

昌子さん 充実した1日であっても翌日は疲れていますね。参加も軽めにせざるをえません。昔「いのちの電話」のボランティアをしたこともありますし、調停員をしたこともあります。離婚の話などあって大変でした。保護司もやりましたが、少年事件などがあり大変でした。そんなことで病気になったのではないかと思います。楽しいボランティアができればいいです。

司会 楽しいボランティアを用意したいですね。小さいお子さんを連れのお母さんのためのボランティアなどもあります。

昌子さん いいですね。

愛子さん ここでエプロンを作って、バザーの時に出品するなどしています。

昌子さん 私はそういうことは不得手なのです。

愛子さん 皆それぞれ得意なことをすればよいのですよ。

由起子さん この居間でエプロンづくりをしていますから覗いてください。この居間で作業していると、端切れがありますとか、いろいろな方が声をかけてくれます。

生活上の不安について

司会 心配なことはありますか？

雅代さん 転ばないようにだけは気をつけています。

恵子さん 皆にこけないようにと言われます。後ろから自転車が来てその人がこけて、その人の上に乗ってしまったことがあります。

司会 それはいつのことですか？ 自分が気をつけていても周りがありますので、歩道でも気をつけないといけませんね。

昌子さん 心配なことは考えないようにしています。娘も私のことは忘れているぐらいです。娘は「何かあれば知らせていただければ行きます」という感じです。私も愚痴を言わないでポジティブに考えないと思っています。そうは言ってもここで倒れることもあるかもしれませんが、その時はよろしくお願いします。

愛子さん 私も転ばないように気をつけています。

由起子さん 昨日ぶらぶらと京大病院の売店に行きましたが、転ばないためのグッズとか売っています。京大病院の売店はきれいで楽しい所です。若い人も一度行くと良いですよ。

昌子さん 私も常連です。

愛子さん 昨日 3 人で行きました。

司会 明子さんの案内で京都巡りもいいですね。

由起子さん これからは御所を庭として、お天気の良い日に、一緒に行く人は行きましょと誘いあって行くのがいいですね。

雅代さん 今御所の梅がきれいですね。

司会 介護認定を受けていない方は、転倒防止という意味で、第 4 月曜日にこの会館でやっている健康教室講座を受けていただくといいですね。

今後やりたいこと

司会 抱負や今後チャレンジしたいことがあれば教えてください。

雅代さん この間の交流会「紅葉狩り」で行った御所で、皆さんが銀杏の木に耳をあてて木の中の音を聞いていた光景は忘れられません。

恵子さん 楽しい思い出ばかりです。また参加したいです。

昌子さん 何か役に立つことができないかと思いますが、体力が問題です。

由起子さん うららかふえはとてもいい場所だと思います。そこでお会いすると情報を得られますし。

司会 カフェはランチだけでなくコーヒーやケーキの提供もしているので、ランチタイムだけでなく利用してください。来年度はサラーム運営委員会主催でサラームカフェなどやりたいと思っています。参加していただいたり、お手伝いしていただけるとよいですね。

愛子さん 私はもうこの齢まできて、できることは何もないけれど、ニコニコしていること

ぐらいでしょうか。

司会 愛子さんはいつお会いしても笑顔で、見習わなければならないとスタッフ皆が言っています。ああでなければ。

愛子さん 恐れ入ります。

司会 70 歳からフルートを習い続けておられるのも皆の励みになっています。

愛子さん YWCA のお部屋を週に 2 日貸していただいて練習できるのは本当にいいです。私が演奏するだけでなく、讃美歌などを皆さんも歌ってくださるといいと思います。

司会 3 月 20 日に「ふれあいコミュニティづくり」の報告会をしますので、愛子さんに出ていただきます。皆さんもご参加ください。

愛子さん 何かイベントがあるときは貼って知らせていただくとよいですね。

司会 それではサラーム掲示板を作りましょう。お誘いになりたいことがあれば、そこに書いていただくと良いですね。YWCA のイベントだけでなく、いろいろな催しの情報交換もするといいいですね。

由起子さん 私は脚を鍛えること、杖なしで歩けるようになりたいです。前は骨折することが多かったですが、骨密度が上がったと言われました。秘訣は歩くこととカルシウムを飲むことです。

司会 海外旅行などいかがですか？韓国など。

由起子さん 中国に行った人は韓国へは行くと迷惑がかかると言われたような時代だったので行けなかったのですが、韓国へは行きたいです。

明子さん 辛い物は食べられません。

由起子さん 辛い食べ物もあります。韓国にも YWCA もあります。

司会 最後にこれを機会に皆さんで何か一緒になさるのも良いですね。この居間を皆さんで積極的に活用ください。本日は長時間ありがとうございました。



第3章

「多世代・多文化ふれあい コミュニティづくり」の取り組み



(にほんご教室「洛楽」)

京都YWCAでは、第1章で述べたように、理事会の下に高齢者住宅事業以外にもいくつかの事業を実施するとともに、会員ボランティアが運営するさまざまな委員会活動が行われている。本章では、それら事業や活動のうち、「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」に関連する事業と活動について述べる。第1節では居場所食堂（うららかふえ）、自立援助ホーム（カルーナ）、女子留学生寮（あじさい寮）の各事業の経緯と関連する取り組みを、第2節では会員ボランティア活動の各委員会が展開した活動とその自己評価を述べる。また、第3節では、さまざまな事業委員会およびボランティア活動委員会が2014年と2015年の2年間に取り組んだ「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」に向けたイベントを紹介する。

1. 関連する事業

多世代・多文化ふれあいコミュニティづくりは、具体的には、従来の会員ボランティアを中心とした活動（外国籍住民に対する相談活動や日本語学習支援、子育て世代への応援プログラムなど）に加えて、会館を活用して開始した新事業によって担われた。新事業として、第2章で述べたサービス付き高齢者向け住宅事業以外に、同時期に留学生寮を開始し、その半年後に自立援助ホーム事業を開始した。また、留学生寮開始と同時期に、すべての事業の利用者、参加者、そして地域の人々が、出会い、交流・協働の経験を実現する居場所事業として「うららかふえ」事業を開始した。



多世代・多文化ふれあいコミュニティ事業の全体図

1.1 ふれあいの居場所食堂「うららかふえ」



1.1.1 開店まで

既述のように中長期ビジョン・プロジェクトにおいて、「多世代がふれあえる居場所の提供」を目指すこととした。そのことを背景に、YWCA らしい、誰でも気軽に立ち寄れ、お茶を飲んでおしゃべりできる場、すなわち「多世代がふれあえる居場所」を提供したいという思いを、建物の大規模改修・耐震工事による新事業計画に盛り込んだ結果、2014年9月に「うららかふえ」開店が実現した。その前の約2年半にわたって、40年以上続いている毎月2回の土曜日のスリフトセールの際にコーヒーや手作りのお菓子を安価で提供するという試みを続けていたことが、現在のお菓子作りの土台になっている。

開店に向けて、必要とされるハードからソフトまでさまざまな準備を行った。食堂のテーブル・椅子の製作依頼、レジ・冷蔵ショーケースの購入、食器・調理道具などの整備をした。また、他のコミュニティカフェ数軒を見学し経営の話を聞いたり、プロによる調理実習を行ったり、数名が食品衛生責任者の資格をとり衛生関連の指導を実施したりした。ボランティア募集や広報も同時進行で行い、ランチやお菓子を作るボランティア登録制度を導入した。開店後の2015年3月にも、神戸のコミュニティカフェ「天国屋カフェ」の方に講演をしてもらい、コミュニティカフェの課題やヒントを共有した。

うららかふえは、以下を目指すこととした。

- ・地域の方々やYWCAの活動の参加者、またYWCAで生活するサラーム、カルーナ、あじさい寮の人々など、YWCAに集う多世代、多文化の人々が出会い、協働し、交流できる場とする。
- ・そのツールとして、安全・安心な品質のランチやお菓子、コーヒーなどを求めやすい値段で提供する。

1.1.2 「ふれあいコミュニティづくり」に向けた展開と成果

1.1.2.1 「うららかふえ」と会館居住者との関係

うららかふえは火曜日から土曜日の11時から16時まで営業しているが、開店当初から現在に至るまで、高齢者住宅サラームの居住者へのランチ提供を役割の一つと考え、バランスの良いメニュー、安全・安心な材料への配慮を念頭に昼食を提供してきた。サラームの居住者の中にはほぼ毎日の昼食にうららかふえを利用され、これを自宅から出てカフェのボランティアと会話するコミュニケーションの機会として楽しみにしている方がおられる。

その中の一人は、カフェの担い手として、キッチンやホールでボランティアと一緒に働かれている。あじさい寮の留学生が単発ではあるがお菓子作りやカフェの手伝いに参

加したり、サラームの居住者有志で、カフェの作業に必要な三角巾やアームカバーを作ってくださいたりもしている。うららかふえは、サラームの方々との、このようなささやかではあるが実際の協働を通して、互いにつながりを深め合い、受け入れ合う場所になっている。

また自立援助ホーム カルーナの利用者からボランティアに加わる人もでてきている。YWCA で生活する人々とカフェで働くボランティアとが、うららかふえで自然に出会うことをきっかけに、その他の交流プログラムへの参加呼びかけを行うことができる。このような居住者との日常的交流が互いに学び合い、助け合おうとする意識の喚起に役立っていると思える。

1.1.2.2. 地域の人々との出会いの場としてのカフェ

日々の食事の場としてだけでなく、YWCA の会員活動の場所としてうららかふえの場を提供することに努め、英語カフェ、絵本カフェ、写真展の「場」としても利用されている。会場提供が、来場者（客）の「出会いの場」への関心を促すきっかけになった。またランチやお菓子作りを担当するボランティアにとっては、それぞれの得意なことや能力を活用する場になっており、さらに苦勞をともにすることで人と人のつながりが広がり深まっている。

地域からの YWCA 活動へのボランティアとしての参加者はまだ少ないが、うららかふえへの認識は深まってきている。近所の高齢者が草ぬきボランティアを申し出てくださったのは、ここでランチを提供していることがきっかけになったと思われる。また、近隣に住んでいたり勤めている方々のランチ利用が定着してきた。このように少しずつだが YWCA に足を運んでくださる方が増えている。ランチの常連となるうちに、顔見知りから友人になった方々や、カフェの場所を展示会のようなイベントに将来使いたいと言って足を運ぶ方が現れた。また担い手として広くボランティアを募集しており、会員ではない方々も少なくない。その中から、活動に共感し会員になる方が出てきた。

Facebook にランチの写真やメニューをアップするなどのランチの紹介が、京都 YWCA のホームページ閲覧につながっている。ランチを通してホームページを見てもらう機会になっている。

1.1.3 課題

うららかふえの営業は、上記のようにさまざまな人が行きかう「コミュニティセンター」的役割を果たしつつあるが、営業開始から期間も短く、課題も多く、道のりはまだまだ遠い。この空間から何を発信していくのかについては、うららかふえ運営委員会およびカフェのボランティアが話し合いを続けなければならない。不特定多数の来客に好感をもって YWCA のミッションを受け止めていただくための方策（アピールの仕方、ことばの選び方、言い回しなど）の難しさを、来客者のアンケートから実感している。

1.1.3.1 「ボランティアであること」についての認識の差

「うららかふえ」のようなコミュニティづくりへの参加者の意識は多様であり、ボランティアそれぞれが活動で何を第一義とするかに差がある。つまり、活動の大きな目標よりも日ごろの活動での満足を求められることが多く、ボランティアのあり方やボランティア活動についての考え方がさまざまであることから起こる労力提供への意識の違いが大きな課題である。その結果として、労力をかなりの程度提供している特定のボランティアに負担が偏る現状となっており、必然的に大きな課題となっている。具体的には、メニューの決定、材料の選択、購入方法、食材の無駄の削減、現場での役割分担と自発的判断の組み合わせ、衛生管理の徹底、使いやすい機材配置、片付けのルール周知、売上計算と報告などの一連の作業が、拘束時間の長さとともに、数人のボランティアの肩に重くのしかかっている。ボランティアの意欲を引き出し、充実感・満足感・協働の喜びにつながるシステムや人間関係の構築に引き続き努力を要するだろう。

しかし反面、2年間継続して苦労や喜びをともにしてきたボランティアは、作業の慣れとあいまって、うららかふえで働くことで互いにエンパワーされてきたことも事実である。同じ世代や違う世代の人と関わりながらここで働くことを、ボランティアが互いをありのまま引き受けていくきっかけにしていきたい。

1.1.3.2 ボランティアが「経営」に関わる難しさ

もう一つの課題は、うららかふえを運営し維持するために、ボランティア募集も含めた広報、ボランティアの配置の調整、担当者未定の日ややりくりなどを行う職員の確保に必要な資金が不安定、不十分であることである。日々違うボランティアがそれぞれメニューを作ることは、材料の非効率な使い方につながりかねない。また、ボランティアの中には、仮にうららかふえを運営できなくなったとしても「京都YWCAがなくなるわけではない」という認識や「お金もうけをする必要がない」という認識がある人もおり、予算達成への意識も必ずしも高い人ばかりではない。京都YWCAの会員活動以外のいくつかの事業では職員が実務を担っているが、うららかふえも職員のコーディネータ的役割がなければ今のようなカフェ運営は不可能に近いと思われる。ボランティアといえども経営に関心をもつことは重要であり、ボランティア中心の市民団体の活動だからこそ、「経営」を考えることは忘れてはならない課題であると言える。

根本的な課題である、「ボランティアとは何か」、「なぜボランティアをするのか」、「ボランティアとしてあるべき姿はどのようなものか」を互いに問いかけ合うことも続けたい。究極的には人間としての幸せは何かを考えることを忘れてはならないが、そのためにも心身共に「ゆとり」が不可欠で、それが現実の行動へのエネルギーとなるだろう。

——多世代・多文化ふれあいコミュニティづくりの中で

1.2.1 社会の中に自立援助ホームがある意味

自立援助ホームとは、家庭養育が難しい、あるいは適切ではない15歳から20歳の高齢児童が、自立に向けた準備を行うホーム（居場所）である。京都YWCAで女子児童向け自立援助ホーム カルーナをスタートしたのは、2015年4月であり、この1年間でカルーナの利用者は7名あった。

ここに来るまでの利用者の経験は多様であるが、母親を中心とした家族との関係、やり取りからたくさんの傷つき経験を持っている子どもたちであり、利用開始時、口をそろえて「大人は信用できない」という子どもたちである。

さまざまな被虐待の経験を大きなトラウマとして抱える彼女たちは、人と関わることに不安を感じ、学校生活も不十分なことが多く、年齢相応の経験値バランスが非常に悪い。そんな彼女たちが、人里離れた山奥の「施設」ではなく、街中の出入り自由な空間で自らの日常生活を整え、自立に向けたチャレンジ体験をする場所として、YWCAというコミュニティは多くの可能性を持っていると言える。そのポイントを以下にまとめてみる。

1.2.2 多様な「人材バンク」としてのコミュニティの有効性

カルーナの利用者が希望する新しいことへの「チャレンジ」を応援するため、それを叶えてくれる多様な人材が必要となる。単体の「施設」ではなく、緩やかな人の出入りがあるコミュニティだからこそ得られる人とのつながりが生まれる可能性がある。実際にカルーナでは、フルートを「もらう」、「教えてもらう」ことがあったり、ストレッチの講師がいたり、革細工の技術を教えてくれる人がいたりなど、それぞれの専門家がボランティアによって提供された。

毎日の生活支援は特定の職員との人間関係を基盤に安全・安心な「居場所」が確保される一方、一人ひとりの新しいチャレンジを実現するサポーターとしての多様なボランティアが関わっており、それがカルーナの特徴でもある。ケーキ作りを教えてもらう、買い物に付き合ってくれる、一緒にジョギングしてくれる、ハイキングに連れて行ってもらう、手芸を教えてもらう等、職員だけではできないことをボランティアの力が可能にした。

1.2.3 YWCA プログラムを通しての出会いとつながり

カルーナの利用者は居場所食堂うららかふえで一緒に働く経験をすることができる。キッチンワークができる子もできない子も、働くことを希望すれば受け入れてもらい、

役割をもらい、サポートしてもらえる。そのような共同作業の中で、大人同士のやりとりも眺めながら、人とやりとりをすることの経験値を増やすことができる。

実際に、京都 YWCA で行われたクリスマス会、そば打ち交流会、チャリティイベントへの参加も、子どもたちにとってはそれまでしたことのない経験であり、大人との出会いであった。

それまでの大人との関係は、親との緊張した関係や児童相談所や施設の職員といった支援者との個別の人間関係に限られていたが、YWCA という出会いと協働の場所を通じて、さまざまな人々とのやりとりを経験できる。また、それを職員と一緒に振り返ることができ、他者との人間関係の築き方、距離感、自分の癖などを自覚することができるようになる。

何よりも重要な点は、YWCA での人との関わりは、特別な支援者としてではない多様なボランティアとのコミュニケーションであり、カルーナを退所後は社会で自立していくことになる彼女たちにとって、実践的な人間関係トレーニングの場となっている。

すなわち、被虐待というトラウマを抱えながら各自の発達段階に応じて自立していくためには、心理面や福祉面での専門的なサポートも必要であるが、特別な支援者以外の大人とのやりとりを経験値として増やしていくことが必要である。ふれあいコミュニティを通して「いろんな大人がいる」ことを実感してもらうことは、これまで自分が見てきた限られた大人の言動を客観的に理解することにつながり、各自がこれからの自分の人生においての有効な、人間関係の築き方を学ぶ機会ともなる。

1.2.4 今後の展望

カルーナは、利用者たち一人ひとりがこの場所でさまざまな大人に出会いながら、ここを旅立った後の小さな支えとなり、次の自立生活に向けての歩みを踏み出す糧になる経験を提供できる場所であり続けることが重要である。そのためには、自立援助ホーム利用者に対する理解を、ボランティアを含めた広く地域の人々に広めることが重要である。彼女たちを取り巻く大人として、特別な支援者ではなく、共に社会を構成する大人として、被虐待のトラウマを抱える彼女たちの「しんどさ」や「できないこと」を受けとめる力、聴く力、受容の力をボランティアをはじめとする周りの大人が身につけることが大切である。

特に今後は、他の会館利用者である高齢者や留学生、会員ボランティアとの個別の交流経験を活発にすること、うららかふえでのボランティアという職業経験の場を有効活用できるようにコーディネートしていきたい。

1.3 留学生寮「あじさい寮」

1.3.1 多世代・多文化ふれあいコミュニティづくりの中の「留学生寮」

YWCA の「留学生寮」は、他の留学生寮にはない特徴がある。以前より一般単身女性のための宿舎事業をしていた時も留学生の入居者がいた。その時からよく聞いた感想に「日本人の友達が作りたい」があった。留学生からは、他の留学生寮にいと大学に行っても宿舎に帰っても「留学生とのみ交流していて、日本人との新しい人間関係を作ることが難しい」という声を聞く。

このこともあり、多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり事業を検討した際に、留学生もコミュニティの重要な構成メンバーとして位置付けた。

1.3.2 「あじさい寮」のミッションと特徴

現在、あじさい寮に入居する留学生は半年ないし1年の短期留学生が多い。この限られた留学生活を支える安全・安心な「居場所」として、かつ留学生以外の多世代・多文化な人々との出会いと交流の体験を積んでもらう場とすることを京都 YWCA あじさい寮のミッションとしている。

1.3.2.1 「すけっと」プログラム

あじさい寮入居者一人ひとりに、日本での生活をサポートする「すけっと」をマッチングした。「すけっと制度」は留学生を YWCA の会員がサポートする制度であり、ホストファミリーになるのではなく「お友だち」になっていく制度とした。また、あじさい寮のプログラムとして、留学生と「すけっと」の方々が楽しめるイベントを企画・実施している。

「すけっと」との交流は各自に委ねられているが、基本的に「すけっと」がすることは、留学生があじさい寮に滞在中に希望する経験を積むことができるように、行きたい所へ行けるようにサポートすることや、やりたいことの実現に向けてのアドバイスや協力を行うことである。同時に、留学生の日常生活が安全・安心なものになるように、定期的なコミュニケーションを通して、困った時には「助けて」と言える関係づくりを目指している。うららかふえなどで会食したり、一緒に旅行に行く「すけっと」もあり、留学生の帰国後も SNS などを活用して繋がり続けている「すけっと」もいる。

あじさい寮の学生の存在は、YWCA の各委員会がプログラムを企画する上でさまざまな影響を及ぼしている。各委員会は、留学生たちの関心に沿ったイベントの企画を行ったり、プログラムの案内の仕方を工夫したりした。

1.3.2.2 YWCA を通じて行われた交流

留学生たちはそれぞれ個性的であり、それぞれの出身国の文化を背負っている。その

中でさまざまな交流が生まれた。

うららかふえを恒常的に利用する留学生は多くはなかったが、一度利用を始めると継続的に利用を続けていた。「ゆっくりできる」、「安心できる」といった声が聞かれた。留学生に関連するイベントをカフェで行えば、より利用者が増えた可能性はあるが、人数の関係上実現しておらず、今後の課題である。サラームの居住者とは積極的な交流が生まれている。「すけっと」を引き受けたサラーム居住者がいたこともあり、留学生たちがお正月やそのほかの機会にその居住者を訪ね、サラームの他の居住者たちとも一緒に食事をしたりしている。

留学生をサポートする「すけっと」は会員であることを条件としたため、これまで会員であった人が新しい形で関わるようになったり、新たに YWCA の会員になって留学生と交流する人も出てきた。

クリスマスなどには、留学生自身が担い手となって、留学生同士でイベントを企画したり、会員との共同イベントを提案してくれた。また、YWCA 全体で実施する恒例のバザールなどにも、スタッフとして参加して盛り上げてくれた。

さまざまな文化的背景を持つ若者たちである「あじさい寮」の留学生が、「すけっと」を引き受けた会員と出会ったり、イベントに参加したり、ボランティアとして活動に参加したりすることを通して、多世代からなる YWCA の会員や地域の人々、プログラム参加者たちと交流を深めることができた。

1.3.3 課題と今後の展望

留学生たちは基本的に学びを目的に滞在しているため、大学での授業に忙しい。短期間の日本滞在中に旅行をはじめとして、自分がしたい体験をできる限りしようとするため、特に関心がなければ YWCA に積極的に関わろうとする者はそれほど多くはない。日本語能力にも個人差があり、それによって関わり方も変わってくる。

今後の課題は、留学生に声かけをして YWCA に関わりやすくすること、また留学生寮としては他にはない魅力である YWCA の「多世代・多文化ふれあいコミュニティ」を募集時点からアピールし、あじさい寮の特質を理解した上で、関心のある人に居住場所として選んでもらうことである。

留学生にとって、大学と寮の往復のみで終わりがちな留学生活の中で、「一般市民である人々」と出会い、協働することは大きな経験であると考えている。個性や文化の違い等でコミュニケーションをとりにくい様子も見受けられるが、今後も継続して「すけっと」制度等による留学生との関係づくりを続けていきたい。

2. さまざまなボランティア活動委員会の活動

本節では、京都 YWCA の会員が主導するいくつかのボランティア活動委員会が「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」に向けて推進した取り組みについて述べる。

2.1 国際委員会

2.1.1 委員会のミッション

- ・ 人々の交流を通じて国際相互理解を深める。
- ・ 京都および近郊に在住する外国人の多様性を尊重し、共に生きる地域づくりを目指す。
- ・ 世界 YWCA につながる地域 YWCA として世界各地の YWCA の情報を伝える。

2.1.2 「ふれあいコミュニティづくり」に向けた展開と成果

「ふれあいコミュニティづくり」を念頭に、あじさい寮の留学生対象の「着物を着よう」、日本の伝統文化を楽しむ「祇園祭に行こう」、「蕎麦を打とう 和食を食べよう いっぱい話そう」のプログラムや「クリスマス集会」を企画・実施した。

蕎麦打ちのプログラムはカフェの場の利用を考えていたが、参加人数や作業の関係から使うことは断念した。しかし、うららかふえ運営委員会と共催することができた。多くの YWCA の居住者に加えて、YWCA に関わっている人やその友人、日本人、外国人とさまざまな人の参加があり、蕎麦を打ちながら、また和食を食べながらあちこちで話が弾み、参加者は大いに楽しまれた。サラームの居住者によるフルート演奏や、カルーナの入居者の参加は特筆すべきである。

「着物を着よう」では、着物の持ち寄り、着付け、折り紙指導、茶道指導、日本舞踊鑑賞などを行ったが、留学生たちが日本の文化に接したことに加えて、留学生と参加会員とに気持ちの交流が生まれたことが収穫だった。

「祇園祭に行こう」は、あじさい寮の留学生、会員、YWCA にほんご教室の受講生、そして一般の方の参加があった。それぞれを組み合わせる小グループを作ったことで、互いに日頃接することの少ない人たちと交流しながら歴史ある祭や古い商家を見学できた。

「クリスマス集会」では、サラームの居住者のお孫さんから、自分の所属するバンドの演奏を祖母に聞いてもらいたいという申し出があり、若者のバンドに演奏してもらった。

以上のように、YWCA の居住者と地域の人、会員などの交流はどのプログラムでも成果があったと思う。参加者のこのような多様化は、企画段階からの会員の意識の変化

によるものとも言える。特に高齢者が参加しようと思ってもらえるような形にすることを以前よりも考えるようになり、「コミュニティづくり」のための基礎作りに寄与したと思う。

2.1.3 課題と展望

課題として、多岐にわたる活動を行うボランティアの「コミュニティづくり」に対する意識の持ち方に温度差があることが挙げられる。京都 YWCA は、敷地、建物などの面で恵まれている。この恵まれた要素を大切に使いつつ、皆で力を合わせて「多世代・多文化ふれあいコミュニティ」を継続・発展させていこうという意志を確認・共有し、「コミュニティ」をつくることでどのように今の社会に貢献できるのかを明確に示す必要がある。またそのような活動によって、ボランティア自身もエンパワーされることが、次世代の担い手を増やすことにもつながっていくのではないだろうか。

2.2 APT (Asian People Together)

2.2.1 委員会のミッション

- ・日本に暮らす外国人が必要とする情報や援助を提供し、彼女ら・彼らが自ら道を切り開いていくようサポートする。
- ・日本社会が人権を尊重する開かれた社会に向かうように個人または社会に働きかける。

2.2.2 「ふれあいコミュニティづくり」に向けた展開と成果

「ふれあいコミュニティづくり」という視点からは、以下の活動を行い、それぞれにおいて多世代・多文化交流ができた。

料理での多文化交流

うららかふえでのランチ作りを担当した。APT が関わる外国人の国の料理であるフィリピン料理やタイ料理をつくることに、フィリピンやタイの人たちが関わった。YWCA で活動している人、あじさい寮の人、サラームの人、地域の人たちなどに味わってもらえた。APT の活動に直接関わってもらえるような関係づくりまでには至らなかったが、料理について説明したり、感想を聞いたりすることで他国の文化に触れてもらい、交流することができた。

教育現場についての研修

「外国にルーツを持つ子どもたちの教育現場は今」と題する研修会を公開で行った。多文化、多国籍、さまざまな年齢層の人が参加し、外国から日本に来た小中学生たちの

実態を広く知ってもらえた。また、フィリピンの人たちが作ったお菓子を提供することによって他国の文化の一端に触れてもらえた。同時に APT のメンバーも、相談を受けている人たちの現状を学ぶことができた。この研修会もうららかふえを使ってゆったりとした雰囲気の中で意見交換をすることを考えたが、多くの参加者が見込まれたため、スペースの関係で今回は断念した。

多文化チャリティコンサート

チャリティイベントとしてコンサートを開いた。これは以前から行っているものであるが、今回は高齢者住宅サラームに住む方々が聴きに來られた。その中には体調の関係で外に出られない方もいたが、居住場所と同じ所で開かれるコンサートなので車椅子で参加され、喜んでいただくことができた。また日頃生活に忙しく、多くの問題を抱えている APT の相談者である人たちは、低価格で音楽を聴くことができ、気分転換を図ることができた。

多文化出張授業

APT は多文化共生への理解のため中学校へ出張授業を行っているが、その際にあじさい寮に住む留学生たちに依頼して、自国や自分のことなどを語ってもらった。そのことにより、中学生は異文化を学ぶことができ、留学生は日本の学校の一端を知り、日本語で自国を紹介する機会を持つことができた。YWCA が過去に運営していた女子宿舍に留学生が住んでいたこともあったが、その当時は留学生に出張授業を頼むという発想はできなかった。留学生寮となって前述した「すけっと制度」ができ、会員が留学生との交流を深めたことにより、気心が知れるようになり、出張授業を依頼することができるようになった。

その他の点として述べたいことは、毎年 APT に寄付をしていただいた人たちに送っているクリスマスカードについてである。以前は APT メンバーが手作りしていたが、カルーナの入居者の作品をクリスマスカードとして使うことができたことも「ふれあいコミュニティづくり」への小さな一歩と言えるだろう。

2.2.3 課題と展望

これらの活動を通して、多世代・多文化の人間関係づくりを推進する「コミュニティづくり」について、APT の視点からの課題を以下に挙げたい。

まずカルーナの入居者との関わりである。彼女たちにも APT の活動の一端を担ってもらえればと考えるが、恐らく今はまだ彼女たちにもゆとりがなく、APT も受け入れるシステムができていない。今後少しずつそのことをも検討していきたい。

あじさい寮の留学生たちは、出張授業には関わってくれるが、研修やイベントへの参加は少ない。彼女たちは留学生としての勉強等に忙しいと思われるが、研修やイベント

に参加することの魅力をうまく伝えていきたい。

APT と周辺地域住民との関わりは作り上げられていない。APT についての情報を伝える広報の仕方に工夫が必要である。

2.3 親・子育て支援活動委員会

2.3.1 委員会のミッション

- ・子育てが孤育てとならないよう、親と子の“個”を育み支援する。
- ・親子の生活の基本である「体」「心」「食」に視点をおいたプログラムを展開する。
- ・親子を中心に京都 YWCA が実施する新事業居住者、地域の人たち、ボランティアに取り組む学生たちが共に楽しむことができるイベントを実施する。
- ・本委員会所属グループ「親子ライブラリー」の活動と、絵本を媒介にコミュニティの在り方を考える活動を行う。

2.3.2 「ふれあいコミュニティづくり」に向けた展開と成果

以前から展開している親と子のプログラムを「ふれあいコミュニティづくり」という視点から継続実施した。

「ひとりぼっちでない」子育てのために

音楽に合わせて体を動かす楽しさを親子で共有する「親と子のリズムあそび」は、同世代の仲間、指導者、親子を見守るために配置されたサポーターとの交流が‘ひとりぼっちでない’子育ての一助となっている。カルーナの入居者が保育サポーターとして、地域の親子と触れ合う機会にもなった。ほかに、親として自らを教育することにポイントをおいた子育てお話し会、食べることは生きることと捉えて実施したマクロビオティック料理教室など、母親を含め子どもを取り巻くすべての人たちがそれぞれに育ち、緩やかなつながりの中で支え合うことを大切にしながらプログラムを展開している。

これらのプログラムに参加する親子が定期的に来館することにより、サラームやカルーナの入居者、留学生がうららかふえやロビーで乳幼児や子育て世代と会うことが日常化している。幼い子どもにとっても、多くの世代、さまざまな文化的背景を持った人々でコミュニティが形成されていることを体感する貴重な経験となっている。また、会館利用者同士がどのようにしたら有機的な繋がりを持てるようになるか、プログラムの企画段階で意識するようになった。

「あきまつり」での協働

「あきまつり」を親子のプログラムなどへの参加者だけでなく、地域に開かれたイベントとして企画した。運営にあたって、サラームやカルーナの入居者に、共にコミュニ

ティづくりの担い手として参加してもらえるよう協力を呼びかけた。会場の一部にうらかふえを使用することにより、参加者の一息つける場所としてだけでなく、参加者同士が出会い、学生ボランティアの活躍する場ともなった。



「あきまつり」での音楽ライブ

ランチ提供と絵本（絵本かふえ）

地域に開かれた文庫として長らく活動が続けてきた「親子ライブラリー」が、うらかふえを利用して毎月「絵本かふえ」を展開した。季節感を大切に選書とメニューを心がけ、ランチ提供とテーマに沿った絵本の排架、読み語りを続けている。乳幼児を持つ母親はもちろんのこと、会館入居者を含め、地域の人たちが集い楽しんでもらえる、絵本を媒体としたコミュニティかふえの実現をめざしている。ランチには、サラームの居住者と留学生がしばしば足を運んでくれるようになり、少しずつ交流が進んでいる。カルーナの入居者へは食事の提供だけでなく、利用者が「絵本かふえ」を手伝う機会もあり、出会いと協働のきっかけとなった結果、一人の利用者に親子ライブラリーのリーフレットのデザインを刷新してもらうことに繋がった。

絵本の読み語りを楽しみに立ち寄る人も少しずつ増えているが、サラームの居住者が読み語りに参加する機会は少なかった。絵本を楽しみにされていた方が居室からあまり出られなくなったので、居室訪問など別の形で積極的なアプローチ方法を検討したい。



絵本かふえ

絵本の読み語りを通じ社会で子どもを育てる意義を考える「絵本の世界」講座（全5回）を開講した。読書ボランティアには比較的高齢の人も多く、会館居住者が社会に関わるきっかけになる可能性が見込まれた。講座終了後、うららかふえで昼食を共にしながら参加者の交流会を開き、講師から受講者への一方通行ではなく、受講者から講師へ、また受講者間の情報交換の機会となり、絵本と子どもに関心を寄せる人の出会いと交流の場となった。

加えて、当委員会のプログラムは午前中開催のものが多いため、終了後のうららかふえ利用を促し交流が生まれるよう心がけている。また毎月の「絵本かふえ」以外に当委員会として、うららかふえでのランチ提供を年に2度担当し、委員と活動メンバー間の交流が深まり、活動資金も得ることができた。

2.3.3 課題と展望

プログラム参加者と会館居住者とは生活時間と関心が大きく異なるため、親子を主たる対象とした当委員会のプログラムに居住者が参加、協力してもらうのは簡単ではない。例えば「あきまつり」で昔の遊びを子どもたちに伝えるコーナーを設け、サラムの居住者に協力を依頼したが、ライフスタイルが確立していて時間が合わない、体調が優れないなどの理由で実現しなかった。企画側が丁寧に準備をし、日頃から来館する親子と入居高齢者が触れ合う機会を多くするなどの配慮が必要であった。

また、出会いのきっかけとなるアプローチの方法も模索している。うららかふえを利用する人とは顔見知りになって声をかけ、少しずつ人間関係を構築しているが、それ以外の居住者とは職員を通してのコミュニケーションに頼らざるを得ない。イベントや講座に参加してもらうにはプログラム自体に多世代・多文化の人々を惹きつける魅力が必要とされる。また居住者に活動の担い手として社会参加してもらうには、即参加に繋がることを求めるのではなく、参加に至るまでの継続的なアプローチ、工夫が必要とされる。

「コミュニティづくり」を担うすべての人たちの想いを汲みつつ、京都YWCAの理念を涵養させ、継続的なエンパワメントを実現し、活動を持続可能にするためのボランティアコーディネートが必要とされている。

当委員会では「子育てが孤育てとならないよう、親と子の“個”を育み支援する」ことを大切にしながら、YWCAに集う人たちを緩やかに見守り、必要な人には働きかけたい。「多世代・多文化ふれあいコミュニティ」の実現がとりも直さず「孤育て」を防ぐ助けとなるため、プログラムに参加する親子と居住者の繋がりを深め、双方向にエンパワーされるよう努めたい。そして活動やプログラム企画の折に「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」を意識し、世代や文化的背景がちがう人にも需要があるのか、居住者に担い手、サポーターとして活動してもらう可能性があるか配慮する

ことも必要である。

「ふれあいコミュニティづくり」の展開にうららかふえの存在は大きい。食を媒体とした「カフェ」という場が交流をもたらし、次の協働を生み出す力を持っているからである。よって、うららかふえの利用を継続し運営に協力すると共に、よりその力を発揮できる方法を考えていきたい。

2.4 ショップ委員会

2.4.1 委員会のミッション

- ・ 40 年続いている月 1 回のスリフトセール（リサイクル品販売）を通して、多くの人を楽しんでもらいながら、リサイクル活動の推進に努める。
- ・ 資源の無駄をなくし、地域、社会でのリサイクル活動の普及に努める。
- ・ 「cozy shop 夏みかん」でフェアトレード商品やお菓子材料とチーズ、YWCA お奨め物産品などのこだわり商品を販売することで、生産者の顔が見え、生産者と消費者双方の理解が深まる YWCA らしいショップを目指す。

2.4.2 「ふれあいコミュニティづくり」に向けた展開と成果

うららかふえに隣接する部屋に「cozy shop 夏みかん」の商品を置き、カフェ内の冷蔵ショーケースにお菓子の材料やチーズを置いて販売している。またうららかふえで使っているコーヒー・紅茶は、ショップでも扱っているフェアトレード商品であり、来られる人々が自然に手に取れるように配慮している。



cozy shop 夏みかん

リサイクル市は多世代・多文化な出会いの場

「ふれあいコミュニティづくり」という視点から見ると、スリフトセールは 40 年間まさに YWCA に関わる人々や近隣の人々との交流の場となってきたと言えよう。この 2 年間はそれに加えて、YWCA の居住者との関わりが生まれた。スリフトセールの定

期的な開催をお知らせしていくうちに、サラームの居住者の中に毎回楽しみに顔を出してくださる方がいる。カルーナの入居者も時々買い物にきたり、前日の準備の手伝いに来てくれたりした。留学生で買い物に来る人もおり、会館居住者の参加が増えた。

また、サラームの居住者で洋裁を趣味にされている方にリサイクル品の布などの材料を提供して喜ばれている。その布でつくったエプロンを年2回の京都YWCAのバザールで売って、売上を寄付してくださるなど、嬉しい循環があった。

YWCAの中庭の夏みかんで作ったマーマレードやイチジクのジャム、干し柿など、ショップ委員会メンバー手作りの食品も居住者に日常的に利用してもらっている。

このような交流を通してボランティアと居住者のお互いが顔見知りになって、出会ったときには会話がはずみ、また手作り食品の感想を聞けることは、作り手の喜びともなっている。

2.4.3 課題と展望

居住者の方々に、今後は活動の外からの参加者としてだけではなく、具体的な働きをする担い手のひとりとなってもらうことでお互いの理解を深めていくことを課題として挙げたい。地域の人たちにも、とくにリサイクル活動としてのスリフトセールを知ってもらい、ともに活動できる方法を探りたい。そのために、スリフトセールやジャム作りなどの作業の案内や意義をさらに的確に広報することが必要である。

YWCAを地域に開かれた多くの人の行きかう場にするために、中庭などの活用、例えば近隣の農家に新鮮な京野菜などを即売してもらおうということも検討していきたい。それがカフェのランチの材料につながれば、さらにコミュニティの広がりが期待できよう。

2.5 「ガジュマルの樹」運営委員会

2.5.1 委員会のミッション

・長期休暇中の小学生を対象として「キッズデИАウト」プログラムを実施する。

2.5.2 「ふれあいコミュニティづくり」に向けた展開と成果

夏に約5日間、冬と春に約3日間「キッズデИАウト」を実施した。プログラムとして、紙芝居やクッキング、公園などへのおでかけのほか、平和学習プログラムや、「京都市地域・多文化交流ネットワークサロン」でフィリピンの文化や遊びを体験したり、「京都コリアン文化センター」で交流したり、京都御所でネイチャーアクティビティなどをおこなった。

これらのプログラムは、参加者である小学生と、若者を中心とするボランティアリーダーが交わる活動でもあるが、YWCAの会館居住者の中で、あじさい寮の留学生へ参加

を呼びかけ、おでかけプログラムのハイキングに実際に参加してもらう機会があった。

また、うららかふえの場の活用として、うららかふえでボランティアリーダーと会員とが食事を持ち寄り交流する「お疲れさま会」を2回実施した。委員会の活動資金づくりとなるカフェでのランチ提供を、ダイアアウトプログラムでボランティアリーダーを務めた人たちと一緒にいった。

この委員会の活動は、地域に暮らす親と小学生の子どもたち、若者をはじめとするボランティアリーダー、京都YWCAで長年キッチンワークを行っているシニアなどを巻き込んだ活動である。また、小学生の子どもたちに多文化の視点を伝えるプログラムを実施してきた経緯があるが、その活動を継続させつつ、上記のようなうららかふえの活用や居住者の巻き込みを検討できた点で、「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」に寄与したと考える。



京都御所での「キッズダイアアウトプログラム」

2.5.3 課題と展望

ボランティア活動を通して社会参加し、多世代・多文化の人間（社会）関係づくりを推進する「コミュニティづくり」の課題として、2点挙げたい。

まず、「言われたことをやる」ボランティアから、主体的に多世代・多文化の人々とともにプログラム作りを担うボランティアへとエンパワーしていくことである。そのためには長期継続的なボランティアの受け入れ体制を作ることが必要であり、「コミュニティ」を一過性のものとしなないためにも、体制をつくることは重要であると考ええる。

2点目は、若者を中心とするボランティアリーダーと、京都YWCA会員やサラムの居住者などが出会い、関係を築いたり、深めたりする場をつくることである。

「コミュニティづくり」にさらに寄与するために、「ガジュマルの樹」のプログラムに参加した子どもたちが、ボランティアリーダーとともに、シニアや留学生などの経験、たとえば戦争体験や留学生の出身国の紹介（遊びや習慣など）を直接聞いたり体験したりして交流することが考えられる。これは上記2点目とも結びつくし、同時に子どもたちが平和や多文化共生を考え、社会に貢献する市民となっていくきっかけにもなるだろう。

3. 実施した関連イベント

京都 YWCA のさまざまな事業委員会および会員ボランティア委員会が 2 年間に実施した「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」に向けた主なイベントやプログラムは以下の通りである。

2014 年度

実施日 10月11日	公開講座シリーズ1 新事業開始記念 上野千鶴子さん講演会 「自分らしい‘老い’を生きるために (サラーム運営委員会企画)
参加 102名	

あかめ工房制作「おひとりさまを生きる」上映後、社会学者上野千鶴子さんにお話しいただいた。上野さんは、誰もが最期は「おひとりさま」になる時代にあって、家族に代わる友人・知人のネットワークや在宅死のための 24 時間対応の介護・医療・看護の必要性を豊富な事例を紹介しながらユーモアを交えて語られた。多くの聴衆が熱心に聴き入った。

実施日 10月19日	あきまつり 2014 (親・子育て活動支援委員会企画)
参加 112名	

子どもの参加者が楽しめるプログラムとしては、「竹パンづくり」、工作、さまざまな国・地域のパーカッションに触れて異文化を感じつつ、参加者全員で音やリズムを楽しむ「たいこあそび」等を実施。人形劇や音楽ライブ、絵本の読み語りも実施した。「指圧」は乳幼児同伴の保護者が日頃の疲れを癒す効果もある一方で、大人の参加者やスタッフもエネルギーを得て笑顔が広がる効果があった。子どもたちがプログラムにスムーズに入り、楽しめるようサポーターの役割を担った学生ボランティアの働きは大きかった。参加者同士が出会い、プログラムの合間に一息つける場所としてうららかふえを設定。多くの参加者が利用し、YWCA の「カフェ」の存在を知ってもらう機会ともなった。

実施日 11月9日	Wonderful Sunday Live ～みんなで平和を奏でよう～ (平和委員会企画)
参加 57名	

元米海兵隊の平和活動家アレン・ネルソンさんのドキュメンタリー映画『9条を抱きしめて』の上映、ジャズピアニスト河野康弘さんによるピース・コンサートを行った。会場にて「南北コリアと中国のともだち展」（南北コリア、中国、日本の子どもたちの絵画展示）を開催した。会員や、関心を寄せる地域の人々と子ども、サラームの居住者など多様な背景、世代の人々が参加する会となり、絵画展示によって近隣諸国の子どもたちに思いを寄せるきっかけを作ることができた。参加者一人ひとりが日本国憲法9条に対する思いを書き、それらを貼り付けて一つのバナーにすることで、初めて出会った参加者たちが思いを一緒に形にすることができた。

実施日 11月13日	公開講座シリーズ2 仁藤夢乃さん講演会 (カルーナ運営委員会企画)
参加 100名	

カルーナの後援会員をはじめ広く一般を対象とした講演会を京都 YMCA と合同で企画した。仁藤さんは『難民高校生』の著者で、多くの女子高校生が難民化している現状や彼女たちの支援活動について大勢の参加者と共有できた。

実施日 11月14日	ざっくばらんミーティング 仁藤夢乃さんを囲んで ＜若者が本音を語る「居場所」＞ (カルーナ運営委員会企画)
参加 9名	

カルーナの入居者や、難民化している高校生と年齢的に近い若い世代の会員が仁藤さんとの座談会を行った。

実施日 12月13日	クリスマス集会
参加 53名	

「カルーナ」を覚え、「自分を大切にする」のテーマで日本バプテスト連盟京都教会の李海勲(イ・ヘフン)牧師からのメッセージ、京都 YWCA のコーラスグループであるエコ・ド・Y の歌、親子ライブラリー（親・子育て支援活動委員会）のメンバーの素話等があり、和やかな時間となった。サラームの居住者も参加された。

実施日 1月31日	公開講座シリーズ3 ー基督教の視点から考えるー 「共に生きる」思想の実践をめざす意味 (サラーム運営委員会企画)
参加 26名	

京都基督教福祉会前理事長の岡山孝太郎さんにお話しいただいた。岡山さんは、死の尊厳が失われ人間関係が希薄になっている現代社会において、誰もが人間らしく生きられる社会を目指す組織は、さまざまな人々が、一人ひとりが活かされつつ協働できるものでなければならぬと述べられた。

実施日 2月11日	2.11 集会
参加 21名	

日本基督教団牧師の小柳伸顕さんから「建国記念の日は私たちにとって何か」をテーマに、戦中戦後の体験を聞いた。大東亜戦争がどのような戦争だったのかをグループに分かれて話し合い、戦争と教育の関係を学んだ。社会教育の場でもあるYWCAの役割について認識を新たにした。

実施日 2月14日	バレンタインデー・チャリティコンサート (APT 企画)
参加 46名	

京都弦楽合奏団によるクラシック音楽や映画音楽などのコンサートを行った。サラームの居住者に、遠くのコンサートホールまで出向くのが難しいので良い機会だと喜んでもらった。また外国にルーツをもつAPTに関わる人たちが、コンサートに来ることができたのを喜んでくれた。

実施日 2月28日	自立援助ホーム カルーナ開所記念講演会 (カルーナ運営委員会企画)
参加 55名	

カルーナ後援会の呼びかけ人でこどもシェルターを運営されている弁護士、安保千秋さんに「子どもの貧困と社会的養護」と題して講演していただいた。府下各地の児童相談所などから来場され、設備の見学者も多く、自立援助ホームのニーズの高さが伺えた。

2015 年度

実施日 4 月 11 日	坪井節子さん講演会 子どもたちに寄り添う ～カリヨン子どもセンターの活動 (カルーナ運営委員会企画)
参加 20 名	

社会福祉法人カリヨン子どもセンター長の弁護士、坪井節子さんのお話を聞いた。子どもに寄り添い、自分の人生を自分で歩いていけるように援助することが一番大切だと話された。

実施日 6 月 23 日	CAFÉ FRIEDEN カフェ・フリーデン 憲法って何？～憲法の「きほん」を知ろう (平和委員会企画)
参加 18 名	

「憲法カフェ」で講師をしておられる弁護士の金杉美和さんをお呼びして、ふれあいの居場所食堂うららかふえの場所を使った学習会を実施した。安保関連法案の国会審議がなされている最中のプログラム実施だったため、日本国憲法条文と、安保法案の内容について学び、疑問や感想を共有する時間となった。日本国憲法に書かれている国民の権利と安保法案の問題点について学んだ。

実施日 7 月 11 日	CAFÉ FRIEDEN カフェ・フリーデン 敗戦から 70 年 ～サラームの女性から聞く＜あの日＞の出来事 (平和委員会企画)
参加 23 名	

サラーム居住の 2 名の方から、太平洋戦争時の実体験をお聞きした。戦争を経験された地域の人々もうららかふえに集って、それぞれの戦争体験を語り合ったり、「戦争はもう二度としたくない」という思いを共有することができた。

実施日 7 月 15 日	日本の伝統文化を楽しむ会 「祇園祭に行こう」 (国際委員会企画)
参加 20 名	

あじさい寮の留学生を中心に一般からの参加者も含め、ビデオを見ながら祇園祭概要の説明を受けた。日本語講師による「やさしい日本語」の説明が好評だった。その後、京都市中心部の鉾町に設置された岩戸山（山鉾）まで移動し、保存会の方からの説明を

聞き見学した。鉾町を散策しながら京都の旧家である長江家を見学した。グループ行動を取り入れたので、グループ内で通訳をしたり、買い物に立ち寄ったりして、文化的にも世代的にも普段経験することの少ない交流が進んだ。

実施日 9月23日	公開講座シリーズ4 「悲しみをこえて、希望への扉をひらくために」 (サラーム運営委員会企画)
参加 56名	

上智大学グリーンケア研究所特任所長高木慶子さんにお話しいただいた。高木さんは人が体験するグリーフ（悲嘆）の感情をさまざまな角度から説明された後、人は時間が経過するにつれて乗り越える力を持つこと、その後には「人を思いやる心」が生まれることを語られた。

実施日 10月24日	CAFÉ FRIEDEN カフェ・フリーデン 「広島原爆を体験した 米澤鐵志さんのお話を聞く会」 (平和委員会企画)
参加 25名	

11歳のころ広島市内の満員電車の中で原爆を体験し、『ぼくは満員電車で原爆を浴びた：11歳の少年が生きぬいたヒロシマ』の著者である米澤鐵志さんに、原爆が落とされるまでの日本社会の状況、その後の自身の体験などを語っていただいた。10代から60代までの戦争を体験していない世代の参加もあり、多世代の人々が集うプログラムとなった。サラームやカルーナの入居者の参加もあった。「核」や戦争の恐ろしさを学び、強い思いを持って行動する米澤さんに勇気づけられる会となった。

実施日 10月25日	あきまつり 2015 (親・子育て活動支援委員会企画)
参加 125名	

子どものみならず子どもに関わる大人や若い世代の学生ボランティアなど多世代が交わるイベントとなった。過去に京都YWCAのプログラムに参加した経験のある子どもや親が久しぶりに顔を合わせ、イベント終了後も数組の親子がロビーで共に時間を過ごした。京都YWCAで実施するプログラムを通して培われた関係性が細く長く続いている様子が垣間見られ、親子が安心して共にいられる場所としての京都YWCAの存在を感じる機会となった。

実施日 10月31日	蕎麦を打とう、和食を食べよう、いっぱい話そう (うららかふえ運営委員会・国際委員会企画)
参加 45名	

あじさい寮の留学生、サラームやカルーナの入居者、一般の方などが、蕎麦打ち資格をもつ講師の指導の下、蕎麦打ちから茹でるところまで行った。その後、蕎麦、寿司、てんぷらなどを用意した食事を囲み、各国の麺のお話、フルート演奏、タイの舞踏、フィリピンの方の歌など、食と文化紹介を通して交流した。多国籍、多世代の参加者でたいへん賑やかなプログラムとなった。

実施日 12月12日	クリスマス集会 (国際委員会企画)
参加 57名	

滋賀県在住のフィンランド人の司祭によるクリスマス礼拝とお話があり、サラーム居住者のお孫さんが所属する Green World という若者のバンドが演奏と歌を披露してくれた。プログラム内容を多彩にしたことで多世代の多くの方に参加いただけた。またフィンランドのクリスマスを映像と共に語ってもらったことで、北欧の日常の暮らしと日本の暮らしとの相違点、類似点を興味深く学べた。

実施日 12月13日	チャリティコンサート 「フィリピンの歌姫」エスメラルダ・チェリル (APT 企画)
参加 40名	

APT の相談者であったエスメラルダさんとその友人がディスコソング、クリスマスソングなどを披露され、APT の活動紹介も行った。Non-Japanese 割引を作り、多くの滞日外国人が参加した。多様な国籍、多世代の参加者が積極的に共に歌い踊って楽しんだが、参加者の中にはサラームの居住者や初めて YWCA に来る人たちもいた。参加者がともにエンパワーされるプログラムとなった。

実施日 1月23日	学習会 「外国にルーツを持つ子どもたちの教育現場は今」 (APT 企画)
参加 44名	

京都市教員委員会母語支援員杉山カリサさん、国立民族学博物館先端人類科学研究部・機関研究員永田貴聖さんを招き、京都市内の外国にルーツのある子どもたちとそれ

を支援する人たちの現状を学んだ。2～5階の居住者の参加はなかったが、APTが普段から関わっているフィリピン人やロシア、インド、中国からの留学生、教員志望の学生などが参加する多文化な会となり、現場の理解促進につなげることができた。APT相談員は10名が参加し、相談活動で踏まえておくべき点が網羅できた。残念ながら地域の人たちの巻き込みはできなかった。

実施日 2月21日	「小さき声のカノン―選択する人々」 上映&鎌仲ひとみ監督講演 (平和委員会企画)
参加 110名	

一般の人も対象に行った上映会は、原発や福島への関心が薄れつつあると言われているにもかかわらず盛況となった。監督の「原発は何があっても許されない」という力強いメッセージに多くの参加者がうなづいていた。京都府下で保養活動が続けるグループや、米軍基地に反対するグループのグッズ販売もあった。

実施日 3月13日	自立援助ホーム1周年記念講演会 (カルーナ運営委員会企画)
参加 30名	

長年名古屋で自立援助ホームを運営してこられた平井誠敏さんに「全国的な自立援助ホームの現状（と傾向）、期待される役割について」と題して講演していただき、その後、カルーナ運営委員会からカルーナの1年間の歩みについて報告した。

実施日 3月20日	国交省補助事業「技術の検証」報告会 「多世代・多文化ふれあいコミュニティをつくるということ」
参加 55名	

基調講演として医療経済研究機構所長の西村周三さんにお話しいただいた。西村さんは、高齢者を昔のイメージで考えてはいけないことや、人と人とのふれあいの大切さを若い人に伝えていくことが大切だと話された。

第2部ではクリエイター・シンセキ製作による京都YWCAの活動を報告する動画を上映後、2年間の事業・活動報告があり、第3部では多世代・多文化の出演陣による演奏や歌を皆で楽しむ時間となった。各部の活動報告展示や写真パネル展示も行われた。

実施日 11/28,12/19,1/30,2/27,3/26	『絵本の世界』講座 ～社会で子どもを育てる～ (親・子育て活動支援委員会企画)
参加 のべ99名	

高校生、子育て中の母親、初孫が生まれる男性、80歳を超える女性など、多世代の受講者が集まり、絵本を媒体として、混沌とした現代をいかに生きるかについて共に考えることができた。日常から解き放たれて自分のために「絵本を愉しむ」ことの先にこそ、「生きる力」となる絵本を子どもたちに手渡し支援することができることを学んだ。5回の講座やうらかふえを利用した交流会を通して、参加者が絵本を語り合える仲間とつながって、それぞれがエンパワーされた。



第4章

「多世代・多文化ふれあい」コミュニティづくり

ニュースレターでたどる

京都 YWCA では隔月にニュースレター（機関紙）を発行している。2014 年度と 2015 年度はニュースレターに「多世代・多文化ふれあいコミュニティ」シリーズとして、新事業である高齢者住宅サラーム、居場所食堂うららかふえ、自立援助ホーム カルーナの各委員会から交代で報告してもらった。本章では、事業毎にその報告を時系列に掲載する。これを通して新事業がどのような思いで展開されていたかを知っていただけるのではないかなと思う。

1. 高齢者住宅「サラーム」

2014 年 5 月号

新事業「女性高齢者向け住宅 サラーム (salaam)」

京都 YWCA は今年 9 月より 60 歳以上の女性を対象にしたサービス付き高齢者向け住宅「サラーム」を本館 2 階（8 戸）にて開始します。

「サラーム -salaam」はアラビア語で「平和」という意味です。サービス付き高齢者向け住宅とは、高齢者に見守りと生活相談サービスを提供し、安全で安心できる生活を送っていただくように配慮したバリアフリー住宅です。

「サラーム」は、女性が主体的に関わる社会づくりを目指す京都 YWCA の理念に沿って、女性をエンパワーする活動を行ってきた 90 年の経験を活かす事業です。高齢者の方々に、年齢も文化的な背景も違うさまざまな人々との交流を通じて、社会と関わりを持ち続ける充実した老後を送っていただくことを目指しています。

開かれた「出会いと協働の場」に向けて

入居高齢者は、必要に応じて職員や会員のサポートを得て、京都 YWCA が提供するさまざまなプログラムやイベントに参加したり、その担い手となっていただけます。サマリア館の食堂「うららかふえ」では、会館に住む留学生や自立援助ホームの若い女性、会館に出入りするお母さんたちや地域の人々と出会うことができます。また、幼児や子どもと接して子育てのお手伝いをさせていただいたり、高齢の方がもつ知識（料理や日本文化など）や人生経験を、若い人々や留学生に伝えて活かす機会も作っていきたいと考えています。さらに、広く地域の人々も参加していただけるような高齢者健康プログラムなどを開催する予定です。こうして生まれる豊かな相互関係を通して、会館全体を魅力あ

る「出会いと協働の場」としていくことが私たちの目標です。

なお、本施設は、「女性高齢者に住まいと社会参加の機会を提供する多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」事業として、2013年度の国土交通省「高齢者・障害者・子育て世帯居住安定化推進事業〈先導的事业〉」に選定されています。

(現在入居者を募集しています。詳細は京都 YWCA までお尋ねください。)

2014 年 11 月号

サービス付き高齢者向け住宅「サラーム」がスタートしました！

天候不順がありながらも改修工事が 8 月末に無事に終了しました。築 46 年の本館は耐震補強され、エレベーターが設置されました。その 2 階に定員 8 名のサービス付き高齢者向け住宅「サラーム」が誕生しました。京都 YWCA が目指す「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」の先陣を切ってサラームへの入居が 9 月 1 日より始まりました。それに先立ち 2 日間の内覧会を行い、高齢者福祉関係者や地域の人を含め、多くの方々にご来場いただきました。

今後サラームを含む「多世代・多文化ふれあいコミュニティ」をサラーム(平和)のモデルとして提示していければと、さまざまな情報発信の取り組みを行っていく予定です。手始めとして、去る 10 月 11 日に社会学者上野千鶴子さんの講演会を開催しました。来年 1 月 31 日には京都キリスト教福社会理事長の岡山孝太郎さんの講演会を実施する予定です。また、2015 年 4 月から、京都 YWCA において、上京区地域介護予防推進センターによる高齢者向け健康プログラムの出張塾が開催される予定です。地域の 60 歳以上の高齢者に YWCA に足を運んでいただく機会となればと思います。入居者の方々に対しては、入居者同士の交流や京都 YWCA を知っていただくための交流会を含め、京都 YWCA のさまざまな活動に親しんでいただくことを支援する取り組みを行っていく予定です。

9 月から営業を開始した「うららかふえ」では、「あじさい寮」に入寮した留学生を含めて、ランチやカフェで出会いの花が咲き始めているところです。玄関の花壇には、会員の手でいろいろな草花が植えられました。これら草花とともに、私たちの活動も育っていくことを願っています。

「サラーム」で野菜づくりに挑戦 ～屋上ガーデンだより

高齢者住宅「サラーム」からアクセスできるホール屋上にプランターを置き、土を入れ、ラディッシュとベビーリーフの種をまきました。3月中旬には芽が1センチ程出揃ったとのうれしい知らせ。その後、間引きもして、順調に成育中です。「サラーム」にお住まいの方たちの楽しみになればと考えて始めることにした屋上ガーデン。トマトやきゅうりなどの苗も植えようと張り切っています。収穫物を食堂で使ってもらえるかな、たくさんできるようなら買ってもらって経費補てんに、などと楽しい想像を膨らませながら。晴天続きになれば水遣りも必要でしょう、支柱立てもしなくてはなりません。手伝ってくださる方があればうれしいです。会館へ来られたら一度見に来てください。きっとあなたも野菜づくりに興味を覚えられることでしょう。

会館の南側入り口、うららかふえへのアプローチにいろんな花が咲いているのもお気づきでしょうか？季節の花を少しずつ増やしています。花壇づくりのアイデアもお待ちしています。



改修された南側入り口と花壇

サービス付き高齢者向け住宅～サラーム ～ 事業開始から 1 年を迎えて

2014 年 9 月にスタートしたサービス付き高齢者向け住宅「サラーム」は、今年 1 月には満室（8 室）になり、事業開始から無事 1 年を迎えることができました。サービス付き高齢者向け住宅は介護施設ではなく住居です。サラームが提供するの毎日安否確認と 24 時間の緊急対応、日々の生活相談に加え、火曜日から土曜日までの昼食の提供です。その他に季節ごとに入居者の方々とご家族、ご友人、YWCA 会員との交流会を行っています。春は御所の桜、夏は中庭で花火を楽しみました。京都 YWCA には語学クラスやさまざまな講座・イベントがあり、入居者の中には英会話を受講されたり、講演会やコンサートに参加される方もおられます。うららかふえの昼食も人気です。配食は食べられなくても、うららかふえのランチは是非食べたいと言ってくださる方や、嚥下機能が回復したら、うららかふえのランチを食べるのが楽しみと言ってくださる方もあります。

事業を始めるにあたり上京区介護予防推進センターに協力をお願いし、センター主催の介護予防クラスを 4 月よりスタートしました。入居者の方だけでなく地域の高齢者の方々も含め、毎回約 30 名が参加されています。

それぞれのライフスタイルを大切に

サラームのユニークな点は、サービスを提供するだけでなく、入居者の方が自ら企画し活動されている点です。例えば昨年のクリスマスは、入居者が企画され、職員や会員が招かれて皆さんと楽しいひと時を過ごしました。また、サラームのリビングで手作りされ、年 2 回のバザー にエプロンやクッションなどを出店して下さったり、うららかふえでお料理を提供している方もおられます。

YWCA の会員や地域の方との交流やボランティアへの参加などを通して、お一人おひとりがそれぞれのライフスタイルを大切に過ごしていただきたいと思っています。

サービス提供だけでなく、ご家族や外部の介護事業所、医療機関などの協力を得つつ、互いが支えあい、与え合う関係が築ける場としていきたいと思っています。

2. 居場所食堂「うららかふえ」

2014 年 7 月号

ふれあいの居場所「うららかふえ」

「うららかふえ」は今年 9 月にサマリア館にオープン予定の京都 YWCA のカフェです。同じ 9 月に開始されるサービス付き高齢者向け住宅「サラーム」で生活する方々や、2015 年 4 月に開設予定の自立援助ホームの若い女性たち、会館に住む留学生だけでなく、YWCA に集まる人たちや地域の方々が出会い、交流し協働できる具体的な場の提供をめざしています。ランチやお菓子の提供をその大切なツールとして位置づけています。

サマリア館は、1905 年海外伝道のため来日したウィリアム・メレル・ヴォーリズが設計した多くの建築物のひとつで、漆喰と木造の暖かい雰囲気建物です。改修工事を行い新しいキッチンを設けましたが、元の趣を残したものとなっています。集う方々がほっとできる「うららか」な「かふえ」となるようにとの願いから、「うららかふえ」と名付けました。

火曜から土曜まで、午前 11 時から午後 4 時まで、委託もありますが、基本的に京都 YWCA の会員が担っていきます。

人々の交差点となるふれあい空間に

高齢者や自立援助ホームの女性たち、留学生たちが、最初は「お客さん」であっても、やがてはそれぞれの思いに沿ってこのカフェで活動できるような、そういう場になればと考えています。カフェからも、様々な人が集まりやすく、一人ひとりがエンパワーされるような仕掛けを考えていきます。

約 3 年前から、月 2 回のスリフトショップの開催に合わせて、会館でカフェが開かれてきました。いずれは、誰が来ても居場所となるようなカフェにしたいという願いを持ちながら活動してきましたが、それが実現できることになったわけです。

これまで培ってきたものだけではまだまだ不十分ですが、試行錯誤を重ねながら、京都 YWCA らしいカフェにしていきたいと思っています。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ふれあいの居場所「うららかふえ」～ 3 カ月が経過して

鶏とレーズンのワイン煮、春巻き、鯖のカレー煮、ビビンバ、油淋鶏、お麩のチャンプルー、天ぷら、ロールキャベツ、豚肉ピカタ、スペアリブ、チキン南蛮、グリーンカレー、魚の煮付け、エスカベッチ、蓮根ハンバーグ、三色丼、蒸しずし、おでん、クリームシチュー。11 月のうららかふえのおもなメニューです。オープンして 3 カ月経ち、現在、毎日 25 名から 30 名近くのお客さまを迎えています。

当初は YWCA のプログラムや委員会に来ている人、会館のサービス付き高齢者向け住宅“サラーム”に入居されている方が大半でしたが、現在は外部の方が半分以上になっています。近所に職場のある方や、たまたま通りかかった方のほかに、最初から毎日のように来てくださる常連さんもできました。嬉しいことに、よくおひとりで来られる方同士が親しくなったという話も聞きました。近くの KBS 京都の社員さんが食べに来られ、ラジオで「安くておいしい」と話してくださったことも客数増加につながっているようです。

月 1 回ずつ、親・子育て支援活動委員会親子ライブラリーによる「絵本カフェ」、クラス・講座事業委員会による「英語カフェ」も始まり、様々な形でカフェが活用されようとしています。カフェ運営を担っているのは、火曜日から木曜日は会員、金曜日は委託、土曜日は京都 YWCA のさまざまな委員会です。オープンまでには営業許可申請、衛生管理ルール作り、ボランティア説明会、メニュー協議など多くの作業がありました。開始後しばらくは、担い手の過不足やメニュー内容のばらつき、手順の不手際など様々なことがありましたが、現在は良いチームワークができつつあり、安全でおいしいものを出せるように協力して頑張っています。

カフェを継続するためには、まだまだ多くの課題がありますが、お客さまだけでなく担い手もエンパワーされる多世代・多文化ふれあいコミュニティづくりの場として、また居場所として、その役割を豊かにしていきたいと考えています。

「うららかふえ」～ オープンから 10 ヶ月

昨年9月にオープンした“うららかふえ”も10ヵ月が過ぎようとしています。火曜日から土曜日まで、会員が中心となって日替わりでランチを担当し、その他に委託をお願いし、また各部や委員会の担当の日もあるというスタイルが定着してきました。

家庭や教会などでは調理の経験が豊富にあっても、ほとんどが素人といっているボランティアの会員ですが、前日の仕込みから当日一日の段取りを見通せるようになりつつあります。メニューも、そこは長年の経験が活かされ、得意なものが決まってきました。

現在一日30人前後から、ときには40人近くの方々がランチに来られます。「おいしかった!」、「ごちそうさま」という声は、何よりの励ましと喜びです。予想以上に来店があり、やむを得ずお断りするときは本当に心苦しいのですが、用意したのに残ってしまう日もあり、そこが面白さでもあり難しさでもあります。

皆で話し合って一つずつ課題解決

これまでに材料や備品の在庫管理、食材の調達、食器や調理器具の管理などいくつかの課題がでてきました。改善をめざして話し合い、対策してきましたが、現在進行形の課題もまだまだあります。会員以外のボランティアの方々や委託の方も、同じカフェの担い手として共に意見を述べ情報を共有すること、昨年度はできなかった「多世代・多文化ふれあい」のうららかふえ主催イベントをすることなどです。

今年になってお得なランチ回数券を作りました。本館のサービス付き高齢者向け住宅にお住まいの方や 定期的に来られる方々など、どなたでもご利用いただけます。お天気のいい日には中庭のテーブルで食事を楽しむのも、開放的で気持ちよく、好評です。京都 YWCA のうららかふえにぜひお越しください。



中庭でのランチタイム

うららかふえ

ふれあいの居場所食堂うららかふえは2年目に入りました。「食が人としての存在の原点。安全・安心の食材を用いて心のこもったお昼ご飯を提供したい」「多世代・多文化の人々が集い、それぞれの得意技を持ちより、明日への力を育める場所でありたい…」、それが「うららかふえ」の目指すところです。

お客様は高齢の方々から若い子育て世代の方々まで。近くの会社から食べに来てくださる「団体さん」もおられ、お客様の数も安定してきて、「ファンができたかしら」と喜んでおります。ただ、どなたにも満足していただける食事づくりは、やはりそんなに簡単なものではないことを実感しています。日替わりメニューの内から「お好みの献立と味」を選んでいただけたらうれしいのですが、メニュー内容を分かりやすくする、アレルギーを持っておられるお客様向けに使用材料を明らかにしていく等々を、今後工夫していこうと話合っています。

サマリア館の趣ある部屋は、食事だけでなく様々な交流や学びの場としても使われています。今のところ、食堂は「絵本かふえ」(親子ライブラリー)や「写真展」(平和委員会ブクラ)、「英語カフェ」、少人数のミーティングなどに利用していただいています。もちろん、お一人でコーヒーと手作りケーキを味わっていただく静かな空間を大事にする気持ちには、変わりありません。

先ごろ、カフェタイムをよりゆったりと過ごしていただくために、カフェの隣にあるフェアトレード商品を並べた「cozy shop 夏みかん」の部屋をカフェ空間としても利用できるようにしました。ランチタイム後の喫茶でのご利用もお待ちしています。ふれあいの居場所として、「心に笑顔のあふれる」うららかふえを共に育てていただけますよう、よろしくお願いいたします。

3. 自立援助ホーム「カルーナ」

2014 年 9 月号

自立援助ホーム「カルーナ」

この機関紙がお手元に届く頃には、「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」の基礎となる改修工事が完了し、京都 YWCA は新たな一歩を踏み出していることでしょう。公益財団法人となった京都 YWCA の新事業の一つとして、改築した会館 3 階部分で自立援助ホーム「カルーナ」を 2015 年 4 月に開設する準備を進めています。

自立援助ホームとは、児童養護施設を退所した後に行き場が無かったり、様々な理由で家族と一緒に暮らすことが難しい子ども達が、安心・安全に生活し、社会の一員として自立するまでをサポートする居場所です。児童福祉法に基づく施設で、京都 YWCA では概ね 15 歳から 20 歳までの女子を対象とし、定員 6 名を予定しています。ホームの名称「カルーナ」は荒野などに自生するツツジ科の植物で、花言葉「自立」「旅立ち」に因んで、子ども達へのエールとして名付けられました。

一人ひとりが大切にされる「共に生きる世界」をめざして活動してきた、YWCA らしい居場所の提供が必要とされています。スタッフやボランティア、支援して下さる専門家がチームを組んで、子ども達の生活基盤を支え、就労支援や就学援助、心身のケアに当たります。「カルーナ」の中で完結するのではなく、子ども達が「うららかふえ」を利用して多世代の人々とふれあったり、お手伝いをして就労体験をしたり、バザーや国際交流イベントに参加して多文化にふれるなど、YWCA に集う人々と地域社会が形成するふれあいコミュニティ全体が、子どもを見守り、社会へ踏み出す足掛りとなることを目標としています。

自立援助ホームの運営は公的資金だけでは厳しいため、後援会を設立してみなさまのご協力をお願いしています。また、ボランティアも随時募集予定です。子どもたちの未来のために、温かいご支援をお願い申し上げます。尚、11 月 14 日（金）に、『難民高校生～絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル～』（英治出版）の著者、仁藤夢乃さんの講演会を行います。自らも居場所をなくした経験をもつ仁藤さんのお話を是非ご聴講下さい。

自立援助ホーム「カルーナ」が いよいよスタートします

自立援助ホーム「カルーナ」は、2015 年 4 月の運営開始に向けて、さまざまな準備を進めています。多くの方からのご協力をいただきながら、定員 6 名の少女たちが生活の場とするために必要な家具や生活用品などを、各個室とリビング・ダイニングなどの共用スペースに設置を始めています。また 4 月からのスタッフの採用を決定し、入居案内や「生活のしおり」の作成、ボランティアの受け入れ方などについて協議を進めています。

昨年 11 月 14 日には京都 YMCA との合同企画として、『難民高校生～絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル～』（英治出版）の著者である仁藤夢乃さんの講演会を実施しました（報告記事は京都 YWCA 機関紙 1 月号に掲載）。居場所をなくした女子高生たちと関わる機会の多い仁藤さんにも、作成中の「カルーナ」の入居案内に対してご意見をいただきました。

また今年度は WAM（独立行政法人福祉医療機構）より助成金をいただき、対象児童に対する理解を深めるための関連講座を実施しています。今年 1 月と 2 月には連続学習会として、滋賀県の自立援助ホーム BiTS-Unit のホーム長をされている廣田敬史さん、社会福祉法人積慶園の相談員をされている桑畑祐治さん、京都教育大学特別支援教育臨床実践センター教授の相澤雅文さんにそれぞれお話いただきました。また 2 月 28 日には、「カルーナ」の開所に先立って、NPO 法人子どもセンター「ののさん」の理事長、安保千秋さんによる講演会を実施しました。

自立援助ホーム登録のための手続きや、各地での広報活動を通して、少しずつ行政や関連団体とのつながりもできつつあります。「カルーナ」の運営を資金面からサポートする後援会員も少しずつ増えてきました。（後援会員は継続して募集中です。お問い合わせください。）まだまだ課題は山積みですが、「カルーナ」で生活していく少女たちの「居場所」となるホームづくりを進めていきたいと思います。

開所から5ヵ月——利用者の旅立ちを支えるために——

自立援助ホーム「カルーナ」を開所してからまもなく5ヵ月が経とうとしています。4月1日に2人の19歳の女性を迎え入れ、安心して暮らせる居場所を提供するとともに、自律・自立して社会に出て行けるようサポートする日々が始まりました。私たちの約4年の準備期間で描いた通りの支援はなかなか出来ませんが、二人が少しずつ自分と向き合い、就労や就学に向けて歩み始めるのを見守っています。7月と8月にさらに一人ずつ高校生が加わり、学習支援など新たな取り組みが必要となるほか、共同生活の中で新たな関係性も生まれてきます。府内の児童相談所や児童養護施設などから、子どもを受け入れてもらえないかという相談も多く、開所一年以内に定員6人に達すること考えられます。

日中は4月から新たに加わったスタッフを含め担当職員が、食事を提供したり、住環境を整えたり、様々な相談にのるなどのサポートに当たり、夜間は職員を中心に一人が宿直し、「聴いてくれる大人」が常駐する体制を整えています。利用者一人ひとりについて、カルーナに来る前からのケースワーカーを含めたカンファレンスを定期的に行うほか、カルーナ運営委員会で現状確認と今後の課題について協議しています。入居者の中には、バザーやスリフトセールで買物をしたり、「うららかふえ」を利用するなど、京都YWCAならではの多世代・多文化コミュニティにエンパワーされている人もいます。カルーナの運営は京都市など行政から児童福祉法に基づき支払われる措置費と、利用者が家賃や食費を一部負担するホーム費と、後援会費や寄付などを含む京都YWCAの財源とで賄われています。今後、彼女たちが就学、就職した際にお祝い金を送ったり、進学をサポートする奨学金制度も考えています。

カルーナで暮らし始めた人たちも、支えるスタッフも、手探りですが一歩一歩進んで行きますので、変わらぬご支援をお願いいたします。

開所から 1 年を迎えて

4 月 1 日に 2 名の利用者を受け入れてスタートした「カルーナ」は、7 月～10 月の間に 1 人ずつ新しい利用者を迎え、2016 年、定員いっぱい (6 名) で初めてのお正月を迎えました。

そして、利用者の 2 人が 2016 年 (1 月と 4 月) に 20 歳になることもあり、1 月 16 日に「新年会 & 20 歳のお祝い会」を開催しました。お祝い会では、成人になるふたりが振袖を着て、もうひとりの利用者も着物を着せてもらい、3 人の着物姿が場をととても華やかにして和ませてくれました。会員に着付けと髪セットをしてもらい、振袖はもちろん着物も「初めて」という利用者は、たくさん写真を撮ってもらい嬉しそうでした。

このように、YWCA の場所と人、ネットワークを活かして利用者の「チャレンジ」を応援しています。例えば、フルートを習ってみたいという希望者には、ボランティアで教えてくれる講師を紹介し、特別レッスンをしてもらいました。身体を動かしたいという希望者には、ストレッチングの講師などを見つけたりと一緒にウォーキングに行ったりしています。革細工をやってみたい、という声に応じて、以前子どものプログラムにご協力いただいた方のアトリエに行き、一緒に体験講習を受けたり、運転免許取得の希望にも応じています。日常生活では、第 3 土曜日に京都 YWCA で開催されているスリフトセールでリュックサックやフリースジャケットなどを買ったり、化粧品や自炊用の食材購入に付き合ってもらったりしています。先日は、誕生日を迎えた利用者のために、「お菓子作りチーム」の方々が、特別にバースデーケーキを手作りしてプレゼントしてくださいました。

開所から 1 年を迎え、カルーナから卒業する利用者もいます。20 歳を迎えての自立、地元に戻って療養しながらの自立、遠方での進学を決めて自立。彼女たちの「自立」の先には様々な困難があると思います。いつでもどんな形でも帰ってきて相談できる「実家」のような場所にしていきたいと思います。



第5章

評価―成果と課題

本章では、市民団体として京都 YWCA が 2 年間取り組んだ高齢者の社会参加を促す「多世代・多文化ふれあいコミュニティづくり」から見えてきた成果と課題について、さまざまな角度から検証する。

1. 本事業固有の背景

本報告の最終的な目的は、京都 YWCA の 2 年間の経験から学んだことを基に普遍的に応用できることを抽出して、今後の高齢化社会の諸課題に取り組む際に広く役立ててもらうことである。しかし、成果と課題を述べる前に、本事業の背景として京都 YWCA がもつ特殊性についても述べておきたい。

前述のように、京都 YWCA は京都市の中心部にある京都御所の西側に立地している。公共交通機関を利用して移動する上で比較的便利な位置にあることも、高齢者住宅サラーム居住者が自由に出かけることを可能にしている重要な要素である。立地の便利さが、サラームが選ばれた大きな理由の一つとなっている。もっと交通の便のよくない場所であれば、高齢者が自由に外出することも難しいであろう。また、都心であるにもかかわらず、京都御所という自然豊かな場所が近くにあるという恵まれた環境にある。

もう一つの特徴は、事業母体が 90 年以上の歴史をもつキリスト教を基盤とする女性団体であることである。これまでに YWCA と縁があったが故にサラーム開業をいち早く知られた方が入居を申し込まれた結果、サラーム居住者は、YWCA の活動に長く関わっている人や、キリスト教という共通の宗教基盤を持つ人が半数を超える。同性であることや共通の宗教基盤を持っていることが、YWCA が催す行事などに違和感なく参加できることなど、一定の影響を持っていると思われる。

これらを踏まえた上で、成果と課題について以下に述べる。

2. 成果

2.1 成果—さまざまな視点から

2.1.1 居住環境

安心できる豊かな住環境の提供

築 50 年近い鉄筋コンクリートの建造物に、耐震補強、エレベーター設置、段差の少ない内装、車椅子での移動にも配慮した幅広い廊下や水回りなどの改修を行うことにより、高齢者が安心して暮らせる住環境を提供することができた。個人の居室は 26 ～ 28㎡とサービス付き高齢者向け住宅の要件を満たすものの、決して広くはないが、共

用の居間があり、階下のロビーや庭をはさんだカフェスペースなどが住居に広がり感をもたせている。

伝統ある建物の魅力

コミュニティカフェを開設した別館であるウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の建物が人々を惹きつけている。築 70 年以上経つサマリア館と名づけたこの建物を、京都 YWCA は文化財扱いするのではなく、日常の活動のための大切な場として使ってきた歴史がある。建物のもつ味わいや落ち着きが、人々の交わりを温かく包んでいる印象を与える。古い建物を壊して新しい建物におきかえるスクラップアンドビルドの発想でなく、古い建物を大切に作る心がここに生きていけると言える。

別館の食堂へはスロープも付設して車椅子での移動も可能だが、一旦屋外へ出て移動しなければならないことや、洗濯物干場へは段差を越えなければならないことなど、少し不親切ともいえる構造も、居住者に積極的に歩くことを促す効果になっているとも言える。

立地の良さ

前述したように、京都 YWCA は京都市の中心部の閑静な住宅街にあり、徒歩 5 分で行ける京都御所で四季折々の自然を楽しむことができる。また、百貨店や専門店の密集する繁華街にも公共交通機関を使って 15 分程で出かけられる。能楽堂やホール、教会、美術館といった文化施設も近隣に多く、文化的に豊かな老後を望む人にとっては魅力的な立地といえる。健康寿命が伸びており、比較的元気な高齢者が増えるなかで、人生を楽しむ充実した老後を送るためには立地の良さも重要なポイントである。

従来、特別養護老人ホームや有料老人ホームは郊外に建設されることが多いが、高齢者数が増加し高齢者像も多様化するなかで、好立地の高齢者住宅への需要が高まることが考えられる。

サービス付き高齢者向け住宅の事業開設母体は株式会社・有限会社 (62.7%)、医療法人 (15.5%)、社会福祉法人 (9.6%) で全体の約 9 割を占めるなかで*、サラームを運営する京都 YWCA は公益財団法人格をもつ市民団体である。非営利法人が長年さまざまな分野の事業や活動を並行して実施してきたことと、自己所有の土地と建物を活かして、こうした立地の良い場所で高所得者層ではない人でも支払い可能な条件で高齢者住宅を提供することを実現できた。

*「高齢者の住まいについて」社保審・介護給付費分科会 第 102 回 (H26.6.11) 資料

2.1.2 新しい高齢者像に向けて

自主性の尊重

人は加齢により「高齢者」、「おじいさん」、「おばあさん」と呼ばれるとしても、現実

の高齢者像は多様である。

サラーム座談会において、ある入居者は、前の施設は「家庭的」であったが、その分、外出が多い自分にとって気軽に出かけられない不自由さがあったと言われた。「高齢者が頻繁に外出する」ことに対する施設側の気遣いに、かえって居心地の悪さを感じたということである。その方はサラームを選んだ理由として、次のように言われた。自由に行動できる住宅・施設に入ろうとしたが、高齢者は部屋を借りることができず、購入しかできなかった。その点サラームはサービス付き高齢者向け住宅であり、家賃と基本サービス料だけで済み、安全な住居と見守り・相談サービスを受けることができる。介護や食事サービスはないが行動の自由がある点でありがたい、ということであった。

また、前に3度の食事を提供している施設におられた別の居住者に、サラームが毎回食事を提供しないことは不自由ではないかとお尋ねしたが、ここへ移って「食べることを自分で支度するようになった」と語っておられる。自分で自分の食事を整えるということをもう一度取り戻したとも言える。

また、ある居住者は今の最大の自分のテーマは「自立」と言われた。これらのことから言えるのは、介護サービスや食事も提供するサービス付き高齢者向け住宅は多いが、介護サービスや食事提供を含む「手厚いケア」や「家庭的」であることが、自立の継続を目指す行動的な高齢者にとって必ずしも望ましいと受け取られないことである。サラームは介護・医療サービスを提供しないため、入居者が「最期まで外部のサービスを受けつつ過ごせるか」は大きな課題であるが、高齢であっても自主性が尊重され、社会参加の機会も提供されるので、「精神的現役」生活を長く維持できると思われる。

2.1.3 人々が交錯する「場」

転居の決断を促すもの

高齢者が住み慣れた住まいを離れて転居を考えるきっかけは、配偶者との死別など同居していた人に変化が起きた場合、本人の心身の機能が衰えて一人暮らしに不安を感じた場合、また段差や水回りなどの住環境を不便に感じるようになった時などが挙げられる。サラームの居住者も「歩けなくなったらどうしたらいいのかなど、いろいろな不安も重なった」と語られるなど、上記のような事情が入居のきっかけとなっている。

一方、聞き取りから、「人生を支えてきた教会の近くだから」という回答が3名、「世話をしてくれる娘の近くだから」という回答が2名、京都YWCAとの関わりからという回答が3名おられた。また、サラームの居住者同士の繋がりや、職員をはじめYWCAに出入りする人たちとのふれあいを好ましく楽しみにしているという声も聞かれた。このことから、住み慣れた地域を離れても、教会やYWCAといったその人のもつ既存の人間関係によるコミュニティに属せること、家族により近くなること、新たな出会いによるコミュニティに期待することなどが転居を後押ししていると考えられる。

共用の「居間」と「うららかふえ」の効果

高齢者が孤独にならずに人との関係を築いていくきっかけを生み出す「場」の重要性が再認識された。

サラームの居住者にとって、サラームのフロアにある共用の「居間」の存在が大きな意味をもつことが分かった。手作り作業をされる親しい間柄の2名の入居者が居間をよく活用されており、そこに人がいることに誘われて他の入居者もそこでしばらくでも時間を過ごされるようになっている。入居者が自室から出て、他の入居者とおしゃべりして関係を深め、情報交換したり入居者同士が誘い合って外出するきっかけを作る場となっている。

また、居場所食堂「うららかふえ」は、サラーム入居者はもとより、ボランティア、職員、留学生、自立援助ホームの入居者、地域の人など、さまざまな人との出会いの場となっている。そこから新しい人間関係も生まれ、会館に居住する人々の社会参加を後押ししている。実際、サラーム居住者からは、人々との出会いがあるお陰でQOLが向上した結果、持病や疾患の改善効果があったという声を聞いている。

サラーム居住者は、自室というプライベート空間と、共用の居間というセミプライベート空間と、うららかふえやYWCAの建物空間などのパブリックな空間を自由に往来できるというバランスの良い居住環境を得ていると言える。セミプライベートやパブリックな共用空間での人々との関係においては仲間同士で関係を律することが求められるが、そのことが高齢者自身をケアの担い手にすらせる「関係性が生み出す力」であるという指摘もある*。

*『ケア その思想と実践6 ケアを実践するしかけ』（2008）pp.219-238 三浦研「ケアのための空間」

人々の間の相乗作用

高齢者は身体能力の低下により活動できる範囲が限定されるようになり、人が来てくれるのを待つことが多くなっていく。しかし「誰かにとって必要な自分でありたい」という思いは高齢者であっても同じである。京都YWCAの場合、自立援助ホーム カルーナの利用者やあじさい寮の留学生が同じ場所に住み、サラームにいる人々に関わりたいと思っているボランティアの人たちもいる結果、自室を出れば人との出会いが自然に生まれる。また、自室にいながらも、会館内で行われているさまざまな活動やイベントでの「人の気配」が感じられる。

一方、サラーム居住者が「養護される存在」であるカルーナ利用者の状況を心配し、声をかけるということも起こっている。あじさい寮の留学生をサポートする「すけっと」プログラムに関わるサラーム居住者もいて、人々の間の相乗作用が生まれている。

2.1.4 組織の特性を活かした取り組み

受容と寛容の伝統

男女共同参画社会を標榜しているとはいえ、日本社会のさまざまな場面で意思決定やリーダーシップの主役は依然としてほとんどが男性である。一方、YWCA は女性がリーダーとなることを前提とした組織である。女性たち、特に家庭の主婦は人前で発言することを敬遠しがちであるが、YWCA は女性を勇気づけ後押しする場であり、自由に発言することを促す雰囲気をもっていると言われる。一人ではできないことを他者と協働して成し遂げることによって、女性のリーダーシップを育んできた歴史がある。このような「一人ひとりを大切に」した「受け入れる雰囲気」は、高齢者住宅サラームの居住者が「まろやか」、「緊張しない」と表現されたことともつながっている。この伝統は、さまざまな関係性を生み出そうとする「ふれあいコミュニティづくり」を進める上で大きな強みとなっている。

「食」を媒介にすることの効用

女性が会員であるボランティア組織として、一般的に女性が得意とする料理やお菓子作りが活動においてこれまで大きなウエイトを占めてきた。コンサートや講演会などのイベントにおいて、休憩時間にお茶と手作りケーキを提供するのがほぼ慣例となっていて、「YWCA らしい」と常に好評である。居場所食堂うららかふえも、毎月定期的に開くリサイクル市の折にボランティアや客にランチを提供する慣例から発展したものである。うららかふえは、会館に集う人だけでなく地域の人にも食事を提供してふれあいの場を提供したいという思いを具体化したものである。

また、料理やお菓子作りのお手伝いは、主婦にとって比較的入りやすいボランティアへの入り口となっており、料理作りなどを通じて会員となって、その後活躍している女性も多い。日々の生活において、「一緒に食べる」ことの効用は計り知れず、人々の関係性を築く大きな契機である。

「多文化共生」へ向けた経験の蓄積

人は豊かな関係性を築くことによって幸福感が増すことが知られており、さまざまな世代の人と接する「多世代交流」を試みている施設は多いが、京都 YWCA では多世代に加えて「多文化共生」を目指した。京都 YWCA は、25 年続く多言語電話相談や多文化出張事業などを行っている外国籍住民支援グループ APT (Asian People Together) や、日本語教室「洛楽」や国際交流グループなどによる豊富な外国人支援を通じた「多文化共生」に向けた経験をもっている。また、既述のように女子留学生寮は定員 20 名の各国の留学生の宿舎であり、留学生をマンツーマンでサポートする「すけっと」プログラムを実施している。異なる文化的背景をもつ人々の存在が、多彩で魅力的なプログラムの提供を可能にしていると言える。

2.2 成果—総合的視点から

本事業は、市民団体として蓄積したコーディネート力を活かして、幼児から高齢者まで、また外国籍住民や留学生、社会的養護の若い女性という多様な属性をもつ人々が交流・協働する場の実現を目指しており、そのプロセスを通じて高齢女性に人々との出会いの機会を提供していると言える。

有給職員だけでなく京都 YWCA に関わるボランティア一人ひとりが「ふれあいのコミュニティ」を活性化する目的を持って活動し、2 年間で 25 を超えるプログラムを実施した。サラームの居住者は、強制されることなく自らの選択でプログラムに参加し、時にはイベントの主役や企画側になる高齢者もあり、積極的な社会参加がみられた。

高齢者のみの施設に暮らす場合と比べて、多世代の人々、異なる文化背景をもった人々に日常的に接する環境にあることは、生活に変化や彩りを与えている。ボランティアや他の若年層の居住者にとっても、高齢者の存在に配慮するようになったり、生き活きと暮らす人生の先輩に触発されることも多かった。また、同じフロアに住む高齢居住者同士の交流が孤立を防ぎ、QOL の向上に寄与したと考えられる。開業から 1 年半という期間であるため、ボランティアなど来館者と居住高齢者の深い関わりまではまだ得られてはいないが、うららかふえの利用などを通して「ふれあいのコミュニティ」が今後も発展、深化することが期待される。

京都 YWCA 以外が行っている多世代交流の試みとして、京都市の場合は、同じ敷地内に幼稚園と特別養護老人ホームを併設する多世代交流型高齢者住宅がある。そこでは、幼稚園の子どもたちが老人ホームを訪問して歌を歌ったりして高齢者と交流を深めるほか、地域の住民福祉協議会が主催する「盆踊り大会」に幼稚園児も高齢者も参加するなど、日常的な三者の交流が行われている。このように、行政も超高齢化社会の到来を見据えて、高齢者の地域包括ケアを目指すプランを推進しており、多世代のふれあうコミュニティが広がる可能性もある。

京都 YWCA は、小規模施設ゆえに可能な、より個人の嗜好にあわせたきめ細やかな対応、多世代・多文化な人が集うことによって提供される多彩なプログラムなどを軸に、今後も行政主導の地域密着型に内包されない人のセーフティーネットともなる「ふれあいのコミュニティ」をめざしていきたい。

最後に、サラーム座談会において幸いにも居住者の方々より「居心地が良い」と評価していただくことができた。その理由は、前述したようにハードやソフトを含めいくつかあるが、重要な要素は居住者と関わる「人々」にあるのではないだろうか。人々の間のコミュニケーションを大切にしてきた市民組織としての姿勢が、サラームに関わるスタッフやボランティアの中に反映されているためかもしれない。

3 課題

3.1 介護・医療サービスを提供しないことによる限界

高齢者住宅サラームは、入居者の自由な行動を保証しているというメリットの半面、介護サービスを提供しない施設としての課題がある。

年齢を重ねるにつれて、それまでできたこともできなくなり、自立して行動的な入居者も「ケアを受ける」ことをいつか選択しなければならない時が来るだろう。サラームで在宅介護を受けることが可能だとしても、介護サービスを受けることに抵抗があるかもしれない。必要な外部からのサービスを快く受けていただくためにどういう配慮が必要かもこれからの課題である。

また、加齢に伴う体力低下や、認知力の問題が発生した場合に、在宅の介護・医療サービスを受けることでどこまで乗り切ることができるか、その限界点を見極める判断について、基準整備が必要であろう。

全国のサービス付き高齢者向け住宅の入居者の年齢は、80代が最も多く5割以上を占め、平均年齢は82.1歳である（平成26年5月31日現在）。入居者の平均要介護度は1.76となっている*。サラームの居住者の入居時の平均年齢は82.0歳と全国平均とほぼ同じだが、要介護度は要支援2が2名のみと平均と比べて比較的低い。一方、サラーム入居時要支援2だった人が、病気で入院するなど要介護度が高くなるにつれて、自室でほとんどの時間を過ごすようになり要介護5になられ、退居を検討されたことから、要介護度の高い高齢者が「ふれあいのコミュニティ」の中で生活するのは困難な点も多いと推測される。訪問介護や訪問医療でどこまで乗り切れるか、サラームに長く居住してもらうためには、家族や知人、地域の医療機関や介護関係者との関係性を深めて、個々のニーズにあったサービスを受けられるよう連携することも必要である。

* サービス付き高齢者向け住宅の入居者【実態調査】（平成25年7月）

3.2 「過去の生活の整理」という負担

サラームの居室面積は26～28㎡であり、入居されるにあたって、荷物を大幅に整理せざるを得ない場合も多い。整理に伴って今までの趣味や活動をあきらめた方もおられる一方、自宅をそのままにして荷物をそこに置いて、サラームに住む方もおられる。あるサラーム居住者は、「居住スペースが狭い」ために趣味を整理しなければならなくなり、「人生を断ち切られる思い」になったと言われた。一般に、前の住まいを処分してサービス付き高齢者向け住宅に移る場合、自分の過去の思い出の詰まった荷物や活動に関わる品々を整理する必要に迫られる。高齢者にとって、引越は大きな負担である

上に、さまざまな側面での整理を迫られる機会である。過去の生活を断ち切るという思いにさせないため、居住者に合わせた共用スペースの雰囲気作りも必要であろう。また、この負担を補うにあまりある生きがいを提供し、「ここに入居して良かった」と思っただけのような場にしていきたい。

3.3 ボランティアの「任意性」

ふれあいの居場所食堂うららかふえは、「ふれあいコミュニティづくり」事業全体に計り知れない効果をもたらしていると思われる。しかし、主婦を中心とするボランティアが担い手であるうららかふえは、次の課題をもっている。

「ボランティア (volunteer)」は文字通り「自主的な意思」による働き手である一方、サラームに居住する高齢者にとって、うららかふえはほとんど「なくてはならない場所」になっている。そのため持続可能な運営が求められるが、うららかふえの存在の「必須性」とボランティアの「任意性、自主性」の間の矛盾がある。途中で投げ出せない事業として持続可能性を追求すると、コストや効率、すなわち「経営」を考えなければならない。しかし、それをあまり強調するとボランティアの意をそぐ可能性がある。「やりがい」や「働くことの意味」を常に確認すること、インセンティブが常に維持されている必要がある。ボランティアが日々の作業だけでなく、うららかふえを社会にとって有意義な事業と捉えて、持続可能性を念頭に積極的に運営に参加し、その結果うららかふえがボランティアにとっての成長の場となることが期待される。

3.4 帰属意識と担い手不足

ボランティアの「任意性」は「不安定さ」の要因であり、カフェに限らず組織の全分野の問題でもある。京都 YWCA は会員制をとっている。既述したように趣旨に賛同した女性は誰でも会員になれるが、会員になることを躊躇し、お手伝いはするが非会員にとどまるボランティアも多い。会員になると会費を支払い、寄付も促され、委員会の一員となれば少なからぬ責任を負う立場となる。会費や寄付でお金を提供しながら、無償で働くことのインセンティブは、会館という活動の場や共に活動する仲間を得て、自分たちが構想し計画した「一人ではできない」活動を主体的に進めていけるという魅力である。

先人たちが積み上げてきた伝統に基づく苦勞の伴う道である。しかし、苦勞を伴うからこそその達成感や喜びもあり、組織への帰属意識も醸成される。会員になって活動することは、自治体等が運営する既成の施設を利用したボランティア活動とは、帰属意識や主体性という点において、かなり異なる。しかし、仕事をもつ女性も増え、現実には会員の減少傾向は大きな課題である。

YWCA は昼間の時間が比較的融通がきく主婦を中心に運営されてきた。仕事を持つ女性の多くは、夕方以降や土曜日しか活動できないため、必然的に常勤で働いていない会員に負担がかかってくるが、この層が細っており、こうした傾向は加速すると思われる。活動の担い手の維持も大きな課題である。

したがって、どのような形態であれ仕事をもちながら、あるいは別の事に関わりながらも活動を続けていけるシステムを工夫していかなければならない。

3.5 地域コミュニティとの関係

これからの地域コミュニティにおいて、行政や企業の役割ばかりでなく市民組織の力がより重要な要素になると思われる。市民組織としては、京都 YWCA のような市民団体や NPO と、地域に根差した町内会・自治会にそれぞれの役割がある。ミッション志向の市民団体や NPO と地域コミュニティとが双方向の関係を築くことが望ましい。京都 YWCA の場合は、立地する地域が市の中心部でありながら居住者が少ないため、一定の地域住民の参加があるものの、直近の地域コミュニティとの関係が十分に構築されているとは言えない。うららかふえへの入りにくさなども指摘されており、長期的な視点で地域コミュニティとの関係を育てる努力が必要である。



第6章

提言と展望

1. 提言

京都 YWCA のサービス付き高齢者向け住宅は、そこに暮らす高齢者が、自立した個人として尊重され、社会参画が促される環境で生活することができることによって QOL が向上することを明らかにしたと言える。社会的弱者となりがちな高齢者や社会的養護の子どもと、親子支援や外国人支援を含め多様な活動を展開するボランティアたちが出会うことの効果は大きい。高齢者だけでなくコミュニティを構成するすべての人が居場所を得て、充足感を感じられることが大切である。

なお、本事業は女性高齢者を念頭に実施したが、2 年間の経験に基づいて男女を問わず高齢者の住まい方に関連して具体的に以下を提言する。

1.1 「コーディネーション」の重要性

会館居住者やボランティアを含め、多様な人々の「入り口づくり」ができた上で、さらに一歩進んで、多様な人々が有機的につながり、一人ひとりが「居心地の良い居場所」を確保しながら、活動を通して、モチベーションを維持し自己実現に向かっていくことが望ましい。そのためには、その一人ひとりに働きかける「コーディネーション」あるいは「ファシリテーション」が必要である。

参加する人々が、共通のミッション（目標）を共有し、ミッションを主体的に担う人になること、さらには参加する場が、一人ひとりが大切にされ支え合う場であり、学びと成長の場となる必要がある。それには、まずプログラムの「参加者」として楽しい時間を実感することから始まるが、参加者を次の担い手に育てていくためには継続した働きかけ、「コーディネーション」が必要である。

分野が異なっても市民団体が共通して持つと思われるのは、人と人を結びつけたり関係を調整する「コーディネート力」である。コーディネート力は、これからのコミュニティづくりのための有用な資源である。

1.2 人々が交差する「居場所」づくり

高齢者に社会参加の機会を提供するコミュニティであるためには、そのきっかけとなる「場」、いろいろな人が交差する場所が必要である。さらに、その場所が一人ひとりを大切にする雰囲気を出していることが参加を促すと考えられる。

医学の進歩もあり比較的元気な高齢者が多くなってきている。また、団塊世代が後期高齢者になっていくこれからの日本社会において、「自己主張のある高齢者」が増えると考えられる。単なるケアの対象と見なされたくないであろう彼ら・彼女らにとって、

自分を理解してくれる人がいて自己実現できる場としての「居場所」があることが望ましい。その居場所は、さまざまな人が行き交う入りやすい場でありたい。その意味で、カフェは一つの有望な形であるが、常設的なお茶飲み空間から始めてもよいのではないだろうか。

1.3 福祉・医療の専門家との連携

日本の高齢者の住まいの現状に目を向けると、65歳以上の97%が在宅であり、要支援・要介護認定を受けている人のうち8割以上が自宅で暮らし、介護施設で暮らす人は全体の3%と100万人に満たない*。これは、在宅高齢者におけるケアのニーズが高いことを示している。超高齢社会に備えて、住み慣れた環境で訪問支援・介護・医療サービスを利用しながら高齢者が暮らし続けられるような政策が、十分ではないが整備されつつある。例えば医療と連携して定期巡回随時対応サービスなどを導入することにより、介護度が高くなった人もサラームのようなサービス付き高齢者住宅で暮らし続けられる可能性が広がる。

医療や福祉の専門性をもたない組織であっても、市民組織のもつコーディネート力と専門家の専門性を融合させることによって、住み慣れた住宅で可能な限り社会参加しながら、長く老後を送っていただけるのではないだろうか。

* サービス付き高齢者向け住宅の入居者【実態調査】（平成25年7月）

1.4 充実した老後のための高齢者住宅の立地

これからの福祉政策の方向性が「住み慣れた家で最期まで過ごす」ことであれば、在宅介護・看護・医療（訪問介護・看護・医療）の充実とともに、高齢者住宅に住む人もそうでない人も、充実した老後を送るためには住居の立地が重要な要素となる。

比較的元気な高齢者が公共交通機関を利用して出かけ、買い物をしたり、食事をしたり、人と会ったり、自然や文化に触れられる場所に行くことで生きがいを感じ、その人のQOLも高められる。交通の便が悪いと住宅敷地内に閉じこもりがちになるのではないだろうか。

京都YWCAは既述のように都心にあって高齢者が比較的出かけやすい場所にある。本事業の経験からも、可能な限り高齢者の住居は公共交通機関が便利な所に立地することが望ましい。

今後の高齢者住宅は、高齢者が安心して出かけることができる場所にあることや、文化施設や医療施設へのアクセスしやすさも重要である。

1.5 適切な規模、親切過ぎないサービス、「食」の重要性

京都 YWCA の高齢者住宅サラームの規模は 8 室であり、居住者同士が親しくなれる適正な部屋数である。複数の階がある施設であっても、単位となる部屋数を適切にすることが必要と思われ、部屋数が多すぎると関係を築きにくくなる。

建物の構造面で言えば、サラームの場合はうららかふえまでのアプローチが決して高齢者にとってやさしいものではないが、居住者はそれに次第に慣れてきていただいている。サービス面で言えば、3 食提供や介護サービスの充実が必要な人にとって必須であるが、食事作りや移動が何とか自力でできる人にとって、自助努力を促す契機となっている。施設やサービスが親切過ぎないことも悪いことではない。

また、人間にとって「食べること」、特に「誰かと一緒に食べること」がもたらす効果は計り知れない。高齢者が多様な人々と食事を共にする場づくりも推奨したい。

1.6 「多文化共生社会」に向けて

さまざまな世代の人と接する「多世代交流」を試みている高齢者住宅・施設は多いが、京都 YWCA ではそれに加えて「多文化共生」を目指した。前述したように、京都 YWCA は外国人支援を通じた豊富な「多文化共生」を目指す経験をもっている。

日本社会は確実に「多文化」社会に向かっている。留学生などの日本に滞在する外国人のみならず、在日外国人や、日本国籍を取得した人や国籍は日本であっても両親や祖父母の何れかが外国籍といった、外国にルーツを持つ人が増えている。現在、結婚するカップルの 20 組に 1 組が国際結婚（日本籍 + 国際籍）、日本で生まれた 29 人に 1 人が多文化赤ちゃん（親の片方・両方が外国籍）と言われている*。今後ますますこの傾向は進むと考えられ、多世代交流だけでなく多文化共生をも目指す取り組みは今後の方向性であると考えられる。「多世代・多文化コミュニティ」は、多様な人々の出会いを促しダイナミックな関係を生み出す無限の可能性を秘めている。

* 認定 NPO 法人多文化共生センター「多文化共生のためのボランティア講座」

2008 年厚生労働省「人口動態統計」より

1.7 市民組織の資源活用と公的支援の必要性

超高齢社会において、人々の幸福を実現する地域コミュニティづくりの主な担い手として、市民組織の役割が一層重要になってくるとされる。高齢者の幸福な老後は、「ケアされる人」と「ケアする人」の関係だけでは限界があり、高齢者とさまざまな人々との関係性の構築が老後の質的豊かさにつながるとされる。市民組織のスタッフやボランティアは、介護については専門性をもたなくても、高齢者にとって気軽に話をするこ

とができ、対等につきあえる存在になることができる。

当団体に限らず、NPO はさまざまな市民グループが独自の蓄積した資源やネットワークを持っている。市民グループは、それらの資源やネットワークを活かし、またコーディネート力を発揮して、高齢者に社会参加を促す「場」や、そんな仕掛けのある「住まい」を提供していけるのではないだろうか。

多くの市民組織の弱点は、財政基盤が脆弱であることである。持続的な活動を実現するためには、市民組織の自主性を尊重しつつ、財政面のみならず多様な角度からの公的なサポートが望まれる。京都 YWCA の本事業の改修工事は国土交通省による助成を得て実現したものであり、この助成がなければ本事業の実現は難しかったと思われる。

1.8 人材育成の器としての市民組織

市民組織は、社会の問題解決のために行動するとともに、市民（ボランティア）をエンパワーし、地域社会の担い手を育てる場である。

高齢化社会において、地域による高齢者の見守りが期待されている。地域コミュニティを支えるのは、経済的見返りを求めることなく自主的に参加し、利他的に行動するボランティアである。ボランティアは既存の利害関係に捉われないため、自由な立場で発想でき、独創的なアイデアを生み出すことができる。

また、ケアを受ける当事者と同じ目線に立てるため、当事者の気持ちを理解でき、それ故、サービスニーズを把握でき、そのニーズに対応することもできる。ボランティアの方も、自分が何らかの形で社会に役立っていることを感じることによって自己実現感を味わうことができる。

ボランティアの人材養成という視点からは、プログラムの提供者も受益者も双方が、互いの自主・自立性を担保した上での「支え合う社会」の担い手としての自覚が求められる。そのためには、自尊感情をもちつつ、他者との関わりの中から自分のことを自分で決める自己決定力や、他者との協働の中から新しいものを創っていく力を養うことが必要である。さらには、決めたことへの責任を担っていく責任感を養い、プログラムの企画のみならず、そのことの意味を問い直す「評価」（振り返り）の作業を協働していくことが大切である。

このようにして、市民活動を通じて地域コミュニティを支える人材が養成されていくと言える。市民組織が、高齢化社会において課題解決の鍵となる人材を育てていく上で重要な役割を果たす。そのことへの社会の認識が広がっていくことを期待する。

2. 展望

日本は超高齢・人口減少社会に向かっており、経済面ではモノへの需要はほぼ飽和状態にあり、経済的には低成長あるいは定常化に向かいつつあると言える。今後、社会の「豊かさ」は、これまでの経済成長に基づく豊かさとは違う尺度で評価されるようになると思われる。人の幸福も、物質的豊かさではなく、人々との豊かな関係性や自己実現度で測られるようになるだろう。幸福感は自分を認めてくれる人や仲間がいること、自分が世の中に何らかの役立つ存在だと感じることによって得ることができると思われる。そのような観点から「これからのコミュニティ像」を展望してみる。

2.1 地域コミュニティづくりにおける市民組織の役割

地方自治の時代と言われるようになり、地域再生がこれからの日本の課題である。かつては課題解決の担い手として行政や企業がメインプレイヤーであった日本社会も、市民組織・NPOや自治会や町内会がコミュニティづくりで今後は大きな役割を演じるようになると思われる。特定のテーマをミッションとした市民組織・NPOと地元根付いた地元住民組織との協働によって、行政による福祉施策が想定できなかった福祉ニーズに応えることや、人々のふれあいを実現する創造的な活動が実現される可能性がある。このような市民組織の多くは人々を結びつけ調整するノウハウをもっていると考えられる。市民組織がもっている、交流と協働を促す「コーディネート力」が活かされてほしい。そのような市民組織が各地にできて、それらの持続可能な運営を、適切な公的支援を通じて社会全体が応援することを待望する。

2.2 多世代・多文化なインクルーシブ社会へ

国境を超える人の往来の増大に伴って多文化社会に向かっている日本において、介護分野でも人手不足のため外国人介護者へのニーズが高まっており、外国人介護者のいる風景が今後あたり前になっていくであろう。

障がい者に関する分野でも、ユニバーサルデザインやインクルーシブ社会への方向性があり、建築の分野でも、年齢、職業、所得水準などが異なる人々が同じ地域で交流して暮らせるようにする「ソーシャルミックス」が試みられるようになっている。

したがって、多世代交流だけでなく「多文化共生」も今後の目指すべき方向性である。このような多様な特性の人々を包括するコミュニティは人々の出会いを促しダイナミックで豊かな関係を生み出す可能性を孕んでいる。

世界で起こっているテロや戦争は、他の文化や異教徒への無理解・不寛容によって生

じているのは周知の事実である。人々が異なる文化に触れ理解を深める機会を日常的に提供することが、巡り巡って地域社会の安全や人々の幸福に役立つだろう。

3. 終りに

本事業の課題認識として、これまでの高齢者施設やサービスでは、ケアサービスの受け手である高齢者が最期まで社会に関わる機会がなかなか得られない事情を踏まえ、高齢者がサービスを受けるだけでなく、高齢になっても新たな人間関係を築き、それぞれの経験や関心に沿った役割を担い、生きがいを感じ、社会に関わっていける仕組みづくりが必要と考えた。その解決策として、医療や福祉の専門分野でない市民団体が、その社会的資源（人的、文化的）を活かして、高齢者に参加を促す仕組みを作ろうとした。

京都 YWCA の場合は、一つの組織の中で「多世代交流」および「多文化共生」を目指したが、地域社会の中のさまざまなグループや個人が協力して「多世代交流・多文化共生」を実現することがより一般的な形かもしれない。

新事業開始からは 1 年半の経験であるため、事業の成果という意味ではこれからが正念場であると考えている。しかし、この 2 年間に於いて「多世代・多文化ふれあいコミュニティ」というコンセプトに多くの人々が共感され、さまざまな形で協力をいただいた結果、本事業を比較的順調に進めることができた。ご支援をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。

本報告が、京都 YWCA がもつ特殊性を超えて、これからの高齢者住宅やコミュニティの在りかたに役立つ何らかの手がかりを提示できたとしたら幸いである。

印刷：株式会社ユニティー